

土坑 SK642 土器出土状況（北から）

上約1.0m分が抜き取られる。縦板は全部で12枚あり、側面の5カ所の太柄で結合する。縦板の外面の中程には、SE506と同様な帯状の黒ずみがあり、外側にタガを廻していたと推定される。縦板は長さ2.7m以上、厚さ約0.04mで、幅約2.7～2.8mとSE507に比べ一定する。内面は平滑に仕上げるのにに対し、外面には手斧痕跡が明晰に残る。土器は遺物整理箱17箱分出土した。

土坑は、SK642から土器が大量に出土するが、その他は少量である。SK642の上器の出土状況は、完形品が多い点、一部重なり合うものの無秩序な出土状況の点、埋土は灰黒色土のほぼ1層の点など、SK636とはほぼ同様の特徴があり、上から下まで一気に埋まったものと考えられる。土器は遺物整理箱22箱分出土した。

石組遺構は、いずれも石組みが1・2段分残存しており、深さは0.25～0.6mある。大半が平面長方形で、SX808のみ平面逆L字形である。SX808からは16世紀中頃の土器が遺物整理箱5箱分出土した。

SX806は、平瓦と土器を積み上げ、内法径約0.3m、深さ0.2mの円形の枠を築いた性格不明の遺構である。14世紀後半頃の瓦質土器片を枠に使用している。

江戸時代の遺構 井戸1基(SE507)、土坑多数(SK645～665他)、溝(SD107～109)、埋桶遺構1基(SX813)があり、整地土ⅠまたはⅢ上面で検出した。大きく17世紀前半、18世紀初頭、18世紀末～19世紀中頃の3時期の遺構・遺物が目立ち、18世紀末～19世紀中頃の遺物量が非常に多い。

井戸は18世紀初頭のSE507のみである。SE507は平面円形の石組みで、上から2.8m分が抜き取られている。3.6mまで掘削したが底には至らなかった。井戸枠内からは、屋根材と考えられる柿板が出土した。井戸枠抜き取り跡から、遺物整理箱33箱分の遺物が出土した。



発掘区全景 北半部上層（南西から）



発掘区全景 南半部上層（西から）

土坑には17世紀前半のものと、18世紀末～19世紀中頃ものがある。後者は発掘区中央部に多く分布し、大量の遺物が出土した。

SK645・646は、いずれも平面梢円形ではば垂直に掘られ、底は平坦である。埋土から坩堝・銅津が出土したが焼土等は含まない。南側の土坑SK647からも鋳造閑

係の遺物が出土した。いずれも 17 世紀初頭のものである。

SK649～653は発掘区北端の整地土Ⅱの下で検出した土坑で、SK651からは土師器皿が完形でまとまって出土した。いずれも17世紀中頃のものである。

SK656は平面隅丸長方形の土坑で、断面形は逆台形である。発掘区内で平面規模が最大である。南側には古い土坑SK655が重複してある。底は平坦で、東北隅にはさらに東西約1.3m、南北約1.8m、深さ約0.5mの平面隅丸方形の土坑がある。底には暗灰褐色粘土が約0.1

m堆積し、その上は大量の土器・瓦・建物部材を含む暗灰褐色土で一度に埋まる。18世紀後半の遺物が遺物整理箱 96 箱分出土した。

SK655・657・658は平面形が細長い溝状の長方形の土坑である。壁面は垂直に掘り込まれ、SK657の東側の底は階段状となる。いずれも底に暗灰色系の粘土質が堆積し、SK655と658では木屑を含む。18世紀後半のものである。

SK662 は SK656 とならび発掘区内最大規模の土坑で

HJ第559次調查 檢出遺體一覽表2

記述番号	形態			年代		主要出土物類		備考
	平面形	平面寸法 (m)	深さ (m)	平面印・礁層	内面 (m)	柱代	上層出土物類	
SD107	東北に向 けた丸方 形	幅1.3、高さ2.7以上	0.6			17世紀中頃		
SD108	東南に向 けた丸方 形	幅1.3、高さ2.8以上	0.6			17世紀前半～中頃		
SD109	西北に向 けた丸方 形	幅0.5、高さ3.4以上	0.6			17世紀後半		壁面土上部から植込み入る。北側口付 に突出。
SD110	南北に向 けた丸方 形	幅0.5、高さ2.2以上	0.4			20世紀前半？		
SK507	円形	東西2.6×南北2.6	0.6以上	円形石組	伴1.0	15世紀鉛鉢	上層遺物、瓦器、瓦片土器類、鐵、銅等 （主に黒漆器、銀漆器、漆器等）、鐵劍（漆 器柄頭）、小鏡（漆器）、私財（銀）、吹き瓶 （漆器）、土器、片貝、板鏡（銀製）、隨出	上から約2.8m分の部分が剥ぎ取られる
SK508	円形	幅2.1	3.0以上	円形石組	伴1.1	20世紀		
SK509	円形	幅1.2	1.1以上	上層・下層三重 下段：円形石組裏蓋	伴0.6	20世紀		
SK515	楕円形	東西1.1×南北1.3	0.6			17世紀後半		複数箇所埋蔵出土。
SK546	楕円形	東西1.0×南北1.1	0.75			17世紀後半		内部底面瓦川上。
SK547	楕丸方形容	東西1.6×南北1.0以上	0.3			17世紀後半		複数箇所埋蔵出土。
SK548	楕丸方形容	東西1.3×南北2.2	0.35			17世紀後半		
SK549	廣角形容	東西1.3×南北1.4	0.35			17世紀後半		軸跡+丁字下で発掘。
SK550	楕円形	東西0.7以上×南北1.1	0.3			17世紀後半		豊島地区で発掘。
SK551	楕円形	東西1.2×南北2.1	0.15			17世紀後半		豊島地区で発掘。
SK552	楕丸方形容	東西1.5×南北1.6	0.8			17世紀後半		豊島地区で発掘。
SK553	圓丸方形容	東西2.7×南北1.1	0.95			17世紀後半		豊島地区で発掘。
SK554	圓丸方形容	東西1.1以上×南北1.7	1.6			18世紀後半？		
SK555	圓丸方形容	東西0.9×南北1.4	1.3			18世紀後半？		
SK556	圓丸方形容	東西0.8×南北1.8	0.8			18世紀後半		
SK557	圓丸方形容	東西1.5×南北1.2	1.4			18世紀後半		
SK558	圓丸方形容	東西0.8×南北1.2	1.1			18世紀後半		
SK559	圓丸方形容	東西1.5×南北2.4	0.75			18世紀後半		
SK600	圓丸方形容	東西2.0×南北1.8	0.5			18世紀後半		
SK601	圓丸方形容	東西2.2×南北2.2	0.3			19世紀前半～中頃		
SK602	圓丸方形容	東西0.9×南北3.0	0.9			19世紀中頃		
SK603	圓角形?	東西0.6以上×南北2.5	1.0			19世紀後半		
SK604	圓丸方形容	東西1.0以上×南北2.0	0.6			19世紀後半？		
SK605	圓角形?	東西0.6以上×南北2.6	0.7			19世紀後半～中頃		
SK606	不整丸方形容	東西2.6×南北2.4以上	0.6			20世紀初期	田園地帯用石（井戸石・力透石）、礎石 （石垣石）、石、石敷石、瓦、石器、陶器、 三輪土器（輪・筒・壺・豆）、骨器、鐵器、 銅器、金銀器、漆器、瓦器、板鏡、石鏡 (石鏡)、鏡、ガラスコップ?	
SK607	不整丸方形容	東西2.1×南北1.7	1.0			20世紀中頃		
SK608	圓角形?	東西1.5以上×南北1.4	0.45	圓方形石組	東西0.3以上 ×南北0.5以上	15世紀後半～中頃		おはな？と呼ぶ。北側と東側に、南の石 が剥ぎ取られる。
SK609	近丁字形	東西2.4×南北2.8	0.6	近丁字形・石壺	東西0.3以上	16世紀後半～中頃		おはな？と呼ぶ。南側に、北側に、西側に は2段分ある。由動の一部のが剥ぎ取 られる。
SK610	圓角形?	東西1.5×南北2.8	0.4	圓角形石組	東西0.3以上	17世紀後半～中頃		石壺は2段分ある。
SK611	不整丸方形容	東西1.4×南北0.9以上	0.3	美力形石組	南北0.2以上	16世紀後半～中頃		石壺は2段分ある。南側の「海」の石が剥 ぎ取られる。
SK612	圓丸方形容	東西2.7×南北2.3	0.3	美力形石組	東西0.3以上	16～18世紀？		石壺は2段分ある。古墳群の一部のが剥 ぎ取られる。
SK613	円形	幅1.0	0.5	円形槽	幅0.7	19世紀後半		石壺は2段分ある。
SK614				南北北方石壺	南北1.0	17世紀後半～中頃?		石壺は2段分ある。南北口付裏面に 鐵劍（漆器）が埋蔵。
SK615				東西南北方石壺	東西1.3	小樽		石壺は2段分ある。南北口付裏面に 鐵劍（漆器）が埋蔵。
SK616	透し字形	東西0.4、奥行き6.3×南北1.5 以上	0.2	東西南北方石壺	東西0.3以上	17世紀後半～中頃?		15～20cmの大きさを得る。形状不明。

ある。平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形である。底は平坦で、中央部のやや東寄りに東西約1.3m、南北約0.9m、深さ約0.2mの平面隅丸方形の土坑がある。土坑底の周囲には、壁面の法面にあわせて杭が打ち込まれている。據置のためと考えられるが、柵や横板はない。底には暗灰色粘土が約0.2m堆積し、その上は大量の上器・瓦を含む灰色土で一度に埋まる。19世紀中頃の遺物が遺物整理箱53箱分出土した。

溝SD107は、発掘区北西部にある17世紀中頃の東西方向の溝で、発掘区西側につづく。底には暗灰色粘土が約0.2m堆積し、その上に焼土・炭を多く含む茶褐色土が堆積する。現在の高天町と高天市町の町境の位置にあることから、町境の南北の宅地の境界の溝と考えられる。町境の状況と年代のわかる希少な発掘調査例といえる。なお整地土はこの溝の北側にしか存在せず、高天市町側のみの整地と考えられる。

明治時代以降の遺構 井戸2基(SE508・509)、土坑2基(SK666・667)がある。

井戸SE508は鉄板で蓋をして埋められており、中に水を湛えていた。井戸SE509は井戸枠内を気抜きして埋められる。いずれも20世紀後半のものである。

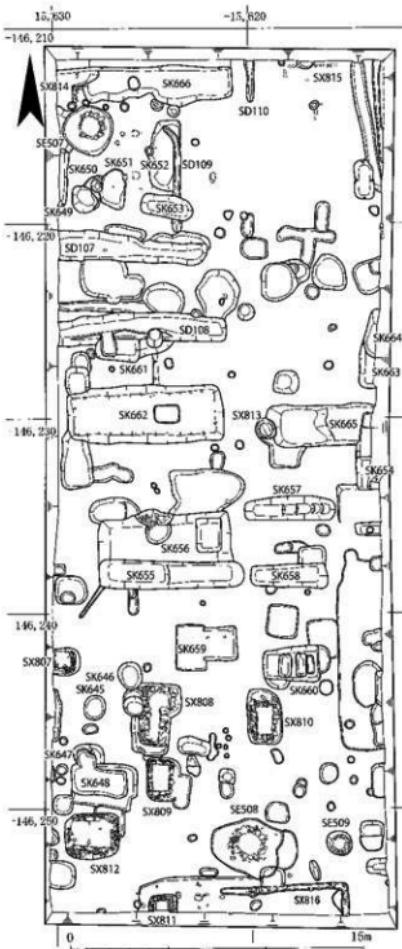
SK666は発掘区北端の土坑で、発掘区外北側につづく。焼土・コーカスを含む黒褐色系の土で埋まり、遺物整理箱20箱分の瓦・上器等が出土した。奈良の酒屋「きくや」の「あられ酒」関係の遺物が多数出土しており、詳しく述べる。20世紀前半のものである。

V 出土遺物

奈良時代～現代までの各時期のものが遺物整理箱1200箱分ある。現在遺物整理中で、主要なものを記す。

SK662出土遺物 遺物整理箱45箱分の上器と8箱分の瓦類があり、詳細は遺構一覧表に記す。19世紀中頃のものである。

上器類は器形・調整技法等から大きく4種類に分けられる。a類は、扁平な底部から屈曲して短い口縁部となる器形である。口縁部のヨコナデ調整は、内面の屈曲部から外面の底部付近まで丁寧に施され、内面の屈曲部がヨコナデ調整によって浅く窪むものもある。口径は6.1～6.9cmのもの(1～16)と7.6～7.8cmのもの(17～20)、12.8cmのもの(21)があり、胎土の色調は橙色系のもののみである。口縁部に打痕の煤が付着するものもある。b類はやや丸みのある底部から丸みをもったまま屈曲し口縁部となる器形である。口縁部のヨコナデ調整は、外面の底部付近から内面全面に施され、最後に外側に引き出すヨコナデ調整が明瞭にある。口径は6.6

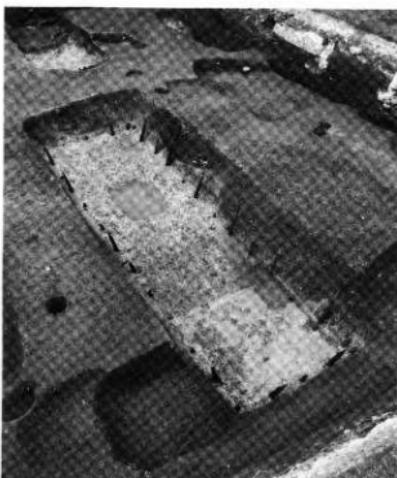


H J 第559次調査 発掘区上層平面図 (1/250)

～7.1cmのもの(25～29)と11.0～11.5cmのもの(30～32)があり、胎土の色調は灰白色系のものがほとんどで、橙色系のもの(25)が1点ある。c類は、扁平な底部から屈曲して口縁部となる器形で、a類に比べ口縁部がやや長い。口縁部のヨコナデ調整はa類と同様で、胎土の色調は灰白色系である。d類は、口縁部と底部間の屈曲がほとんどない扁平な器形である。口縁部のヨコナデ調整は、内外面とも口縁端部の狭い範囲にしか施され



溝 SD107 (東から)



土坑 SK662 (北西から)

ない。胎土の色調は灰白色系で、砂分の少ない精良な胎土である。

土師器皿全体では a 類が大半を占め、b 類がやや少ないものの一定量あり、c・d 類はごく少量である。c・d 類は17世紀頃によく見られる型式で、混入も考えられる。いずれの皿も、口縁部に灯明芯による焼が1～数ヶ所付着するものが多い。また a 類には口縁端部が、1ヶ所小さく欠けるものが一定量見られる。

土師器炮烙は、外型作りの底部に口縁部を作り付ける。底部の粘土円盤の端部を外反させ、その上に口縁部を接合し鈎または鈎風のものを作るもの（39・42・43）と、鈎のないもの（40・41）とがある。42と43の鈎の外側はヘラケズリ調整される。39～41は橙色系の胎土で、42・43は黄澄または灰白色系の胎土である。

土師器高杯は浅い円盤状の杯部に、粘土板で作った脚部を接合する。外面はすべて指壓さえで、口縁端部や脚部の裾すら一切ヨコナデ調整されない。胎土は49と51が黄澄色、50が橙色である。50の脚部内面には「春日社」の墨書がある。

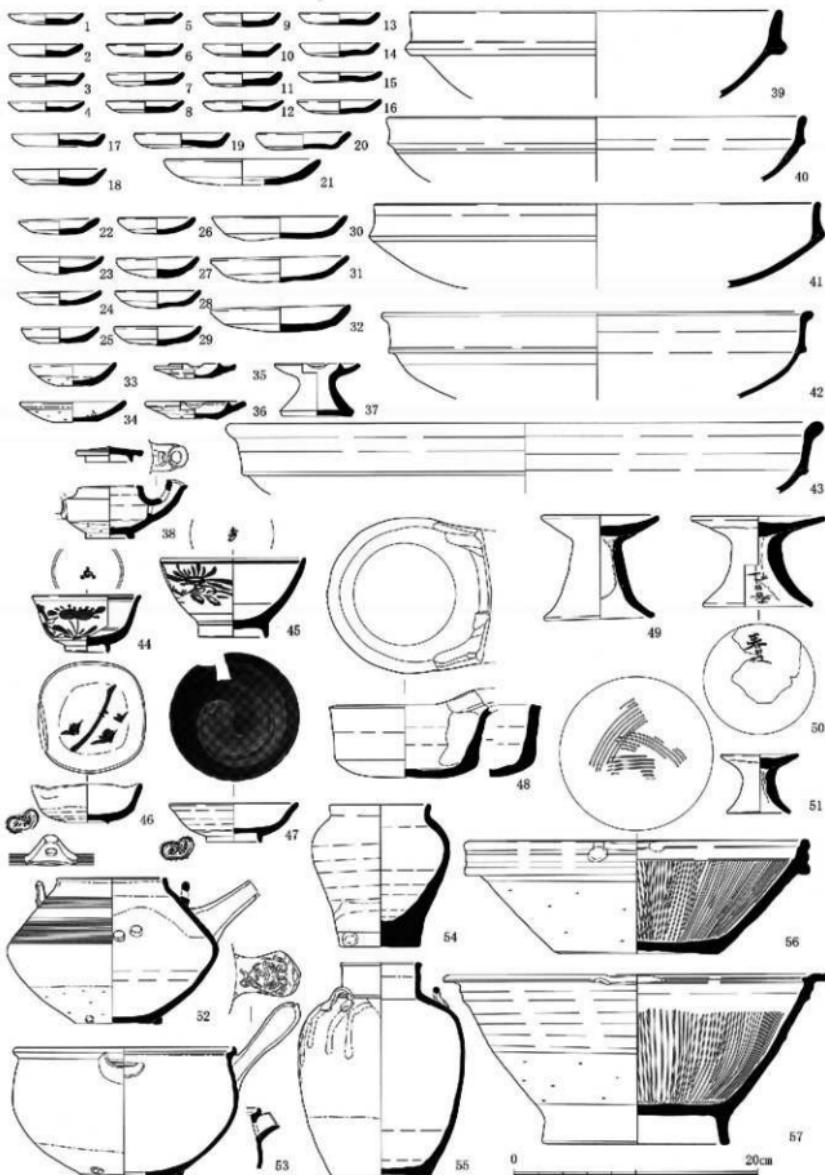
48は土師器で麻浸しと呼ばれる、浅鉢の口縁部の一方を舌状にのばした器形である。本来は麻糸を筋ぐ際に使用される土器であるが、茶器の灰器・花活けに転用される例がある。なお48は舌部が欠損する。

国産磁器には肥前産（45）・瀬戸美濃産（44）の他、三田産など各地のものが含まれているが、产地不明のも

のもある。蓋付きの端反り碗、44のような小型の端反り碗が多く、同じ絵柄のものが數個体ある。

國産陶器は、信楽産のものが多いが、そのほとんどは京・信楽系と称される製品である。33～38は灰釉の灯明皿と灯明受けとカンテラ、52は鉄釉の土瓶、53は灰釉の行平鍋、55は鉄釉の三耳壺でいわゆる腰白茶壺、57は高台付の擂鉢で底部には墨書があるが判読できない。この他にも多数の器種がある。46と47は赤崩産の小皿で、外面の高台近くに瓢箪に囲まれた「赤ハタ」の刻印がある。46は赤褐色系の胎土で、暗緑色の灰釉に内面に鉄絵で草花文を描く。47は黄橙色系の胎土で、灰オリーブ色の灰釉に内面に白泥で文様を描く。この他「赤ハタ」の刻印があるものが1点、刻印はないが、47と同一のものが1点ある。さらに47と似た胎土の製品が数多くあり、赤崩産の陶器が他にも多数あることが考えられる。54は北九州産の鉄釉の壺で、小倉名物の三官鉢の容器である。1個体のみ出土した。56は堺産の擂鉢である。

SK666 出土遺物（巻首図版3参考） 遺物整理箱7箱分あり、詳細は遺構一覧表に記す。20世紀前半のもので、「あられ酒」に関係した遺物（陶器徳利・猪口・片口、ガラス瓶）が多量に出土した。陶器徳利は瓢箪形で、高さ約13.5cm、幅約8.5cmある。底面を除き外面に灰釉を施釉し、色調は淡いオリーブ色である。外面ロクロナデ調整で、外面下半をヘラケズリする。外面の底部近くに「きくや」の刻印を押す。完形品を含め十数個体分



H J 第559次調査 SK662 出土土器・陶器 (1/4)

が出土した。灰白色の胎土で、赤褐色と考えられる。この他、鉄軸陶器の徳利が数個体分ある。外面にはイチジン描で「中筋町 本 米浪 □□」、「△ 白雪 ⑦」、等が描かれる。丹波波瀬と考えられる。ガラス瓶は瓢箪形で、高さ約18cm、幅約8cmある。現在販売されているあられ酒の瓶が瓢箪形であり、瓢箪形の徳利・ガラス瓶はいずれもあられ酒の容器と推定される。

V 調査所見

今回の調査では、奈良時代以降各時期の遺構を検出し、奈良町遺跡の変遷の一部を知ることができた。さらに奈良町遺跡内では比較的広範囲の発掘調査であり、特に宅地区画の様相が明らかになった点が大きな成果と言える。現在も出土遺物は整理中であるが、現状で指摘できる成果として次の2点があげられる。

1 調査地内では11世紀末頃から遺構が急激に増加しており、土地利用の画期がこの時期にあることがわかる。9世紀～11世紀末の遺構は、11世紀中頃の井戸1基のみに対して、11世紀末～12世紀前半の遺構は井戸1基など17基以上あり、その増加は注目される。またこの時期の遺構の特徴は、土器師皿の一括投棄が行われる土坑群が多数あることである。これらの遺構の意味するところは、一説には共食を伴う儀式に関わるものとの意見がある。土器と共に箸が大量に出土する土坑SK618はその可能性が指摘できるものの、土器のみ出土するものや、埋土の状況などが時期により多少の差があるなど、出土状況は一様でないことから、さらに検討が必要である。調査地南側の林小路町内の発掘調査でも11世紀末頃から遺構が増加する同様の傾向が見て取れ、調査地周辺は、興福寺の西に隣接する好条件のもと、比較的早くから居住域として利用されたものと言えよう。

2 中世と近世の宅地区画の一端が明らかになった。中世の区画は、発掘区北端のSD105をはさみ南北に分かれしており、北側が一段低く削られている。この区画は12世紀中頃には完成しており、以後も区画は機能し続け遺構は両区画内で完結する。

当時の宅地が道路に間口を開く奥行きのあるものとすれば、北側の区画はその位置関係から西側の東六坊坊間路側に間口を開いていたと考えられ、掘立柱建物SB209は宅地最奥部に位置する。南側の区画では、遺構分布から次の4点の特徴が指摘できる。①11世紀末～12世紀後半の土坑が発掘区東半に南北に2群に分かれて分布すること、②13世紀頃の遺構は区画内に広く分布すること、③16世紀頃の石組遺構は南側の区画の南半部に集中すること、④正確な時期が特定出来ないものの、掘立柱建物

と考えられる小柱穴は区画北端部の西寄りと、南半部のやや中央近くの西側に集中すること。①の点からは、これら土坑群が宅地の最奥部に掘られたものと考えれば、西側に間口の開く南北に並ぶ2つの宅地が想定できる。④の点の2群の小柱穴群も、この南北2つの宅地を反映しているものと考えられる。③の点では、南半と北半の利用形態の差が明瞭に現れている。石組遺構を穴藏とすれば、南半=生活の場、北半=空閑地と考えられよう。この南半の部分はその位置関係と性格から、南側に間口を開いていた宅地の一部と想定できる。以上のように、南側の区画内では11～12世紀頃には西に間口を開く南北2つの宅地が、16世紀頃には南に間口を開く宅地に変化している。ただし13～15世紀の遺構の詳細が不明であり、間口の変化する時期や要因については今後の課題である。

江戸時代の宅地区画は、区画を示す遺構が見つかった他、遺構分布からも復原できた。最初にそれらを理解するために、当時の高天町周辺の宅地割りに関する史料について記す。

当時の高天町の状況を知る文献には、「奈良町北方¹¹拾五町家職御改帳」（以下「家職御改帳」と記す）がある。当史料は原本がなく藤田文庫の写本のみ伝わる。本文は、寛文十年（1670年）の各町の住人を、宅地間口・職業・名前の順に書き上げているが、各家が町内のどこに位置するかの記載はない。高天町の部分には、合計50軒の宅地が記されており、最初に現在の町内に各家の位置を比定する作業を行う。まず史料の記載順番は一定の規則性があると想定され、町内の1カ所から隣接する家を順に記載するのが通常と考えられる。そこで居住者が判明する宅地を起点に各家を割り振れば、各家の比定を行うことができる。高天町では、1番目に記される「江戸屋与左衛門」の屋敷が町内の南西隅の林小路町との境にあり、その北に今春家の屋敷があることが「奈良坊目拙解」からわかり、記載の起点と方向が判明する。詳述を省くが、文献に記される宅地を時計回りに配置してゆくと、現在の町内にちょうど収まり、当時の宅地割りが復原できる。さらに当時の宅地の間口と現在の宅地の間口は多くの場所で一致しており、現在の宅地割りが当時まで遡ることがわかる。また敷地の奥の形態は、明治23年の「奈良町全図」の地籍図から推定可能である（次項右上図高天町宅地割図参考）。

以上から調査地内の宅地を復原すると、「家職御改帳」の時期には南に間口をとる宅地が東西に3つ並び、間口は西から5間4尺（宅地1とする）、3間4尺（宅地2）、3間（宅地3）あることがわかる。住人は宅地1が「興

福寺仕丁「新左衛門」の借家で「米屋」の「仁助」、宅地2が「興福寺仕丁「源兵衛」の借家で「生布数合」の「次郎兵衛」、宅地3が「興福寺仕丁「太兵衛」である。明治の「奈良町全図」では中央の宅地2が南北に分割されており（宅地2A・B）、さらに宅地2の奥には宅地3が西側に折れ曲がり入り込んでいることがわかる。また宅地1は中程で東側に鉤型に曲がっている。

中筋町も「家職御改帳」に記載がある。しかし中筋町部分は発掘区内の北東隅の一部に限られ、遺構もごく僅かなことから、宅地復原は省略する。

高天市町は幕末の町絵図が残り、宅地割りと居住者が明らかである。それによると調査地は、西に間口をとる南北に2つ並ぶ宅地の最奥部であることがわかる。間口は南から3間半（宅地4）と3間半（宅地5）で、住人は南から「油屋 佐兵衛」「笠木屋 藤兵衛」である。これらの宅地は現在の宅地の規模とほぼ同じで、当時から変化はなかったものと言える。

これらをもとに、発掘区内に宅地割りを落とした図が右下の発掘区内宅地割図である。町境の状況は、高天町と高天市町の境では、宅地1と宅地4の間に東西溝SD107が存在し、SD107の年代から17世紀前半には町境をはさみ南北の区画が存在したことがわかる。中筋町と他の町境には遺構が見られないが、中筋町と高天市町間のやや東よりに南北溝SD110があり、その西側には宅地5からつづく土坑SK666があることから、町境が現在よりやや東側にあった時期が想定される。SD110とSK666の年代から18世紀後半以降～20世紀初頭の時期である。

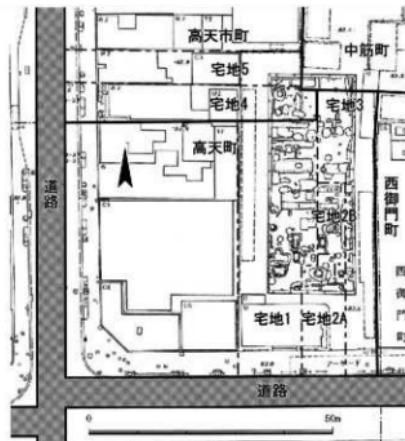
各町内の様相は、高天町内分が調査面積が広く成果が上がっている。調査地内には宅地1～3があるが、各境界を明示する遺構はない。しかし復原した宅地を発掘区内にあてはめると、各遺構はほぼ宅地内で完結しており、遺構の分布が宅地に規制されていることが見て取れる。また大型の廐棄土坑が宅地奥側に分布することも指摘できよう。これら宅地は、遺構の年代から18世紀末頃からのものと確認できるが、それ以前は遺構がなく状況は不明である。

高天市町内では、20世紀の土坑SK666がほぼ宅地5内に収まる。17～18世紀の土坑SK649～653と井戸SE507は、一見宅地4内に納まるが、調査面積が狭く幕末の宅地4と5がこの時期まで遡るかは不明である。

最後に中世と近世の宅地区画の関係を見ると、中世の南北の区画と、高天町と高天市町の町境がほぼ重なる点は重要である。奈良町は、慶長13年（1609年）に町



高天町宅地割図 (1/2,500)



発掘区内宅地割図 (1/1,000)

切りが行われた区域が確定されているが、高天町と高天市町については、既にあった中世の区画を踏襲して町切りが行われたと言えよう。

今回の調査では奈良町遺跡の出現と形成、構造の一部が明らかになった。調査地は、広域な都市遺跡である奈良町遺跡内の僅かな部分にしかすぎないが、興福寺の西に隣接し遺跡内でも早くから開発が行われた場所であり、奈良町遺跡の変遷を語る上で重要な地域であることは間違いないであろう。（中島和彦）

1) 奈良市教育委員会「奈良町北方武拾五町家職御改帳」

『奈良市歴史調査報告書（二〇）』2004

10. 平城京跡（左京四条五坊十六坪・三条大路・東五坊大路）の調査 第560次

事業名	店舗付事務所新築	調査期間	平成18年8月21日～9月24日
届出者名	(株)津多家	調査面積	110m ²
調査地	奈良市下三条町28-1他	調査担当者	武田和哉

Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条五坊十六坪の北東角から三条大路と東五坊大路の交差点付近に該当する。周辺の過去の調査例のうち、最も近接する三条通り北側の県1998年度調査では、奈良時代の溝・井戸・土坑、平安時代～中世の溝・井戸・土坑等を検出している。今回は北・南の2発掘区を設け、三条大路南側溝と東五坊大路西側溝の検出等を目的とした。

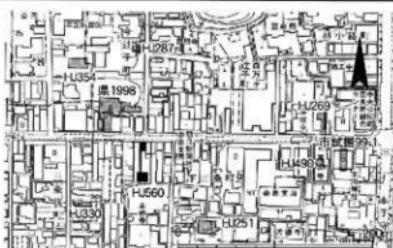
II 基本層序

北・南発掘区とともに基本的には同じであり、クラッシャー・アスファルトを含む造成土以下、黒褐色土、黒褐色粘質土、暗茶灰色土、淡茶灰色土等が続き、暗茶灰色粘質土を経て現地表面下1.0～1.1mで黄褐色粘土または砂礫の地山層に達する。地山の標高は69.2m前後である。

III 検出遺構

検出遺構には、鎌倉時代の溝、室町時代の井戸、江戸時代の土坑等がある。以下、主要な遺構について記す。なお、各遺構の概要は、下記の一覧表にまとめた。

S D 01 は南発掘区および北発掘区の西辺で検出した南北方向の素掘溝。南発掘区では西肩を検出できた箇所もあるが、北発掘区では東肩のみを検出した。溝の最深部の座標値は、X = -146,585 m Y = -15,927.60 mである。S D 02 は北発掘区の北辺で検出した東西方向の素掘溝。遺構の重複関係から、S D 01 より新しい。溝心の座標値はX = -146,553.80 m Y = -15,925 mである。S E 03 は、南発掘区中央やや東よりで検出した井戸。素掘りで枠の痕跡はない。掘形は平面円形に近い不整形を呈する。S K 04 は、南発掘区の中央やや南寄りで検出した土坑。平面隅丸方形を呈する土坑内北東隅には、17世紀初頭の土師器羽釜が4個埋められていた。S K 05 は、南発掘区北東隅で検出した土坑。土器片がわずかに出土したのみで、詳細な時期は不明。S E 06 は南発掘区中央北側で検出した井戸で、ガラスや煉瓦が出土した。



H J 第562次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

IV 出土遺物

遺物は、遺物整理箱16箱分が出土した。その内訳は奈良～平安時代前半の土師器・須恵器・墨書き器・鎌倉時代瓦器・鎌倉時代以降の軒丸瓦(巴紋)・刻印平瓦・江戸時代の土師器・墨書き器・銭貨(寛永通宝)・平安後期～室町時代の輸入陶磁器(白磁・青磁)・時期不明の土管・石仏・紡錘車・骨・錢貨・釘・鐵製品(用途不明)・銅製品・韁羽口・鉄滓・板状木製品・曲物底板・石鍋などである。

V 調査所見

本調査で検出したS D 01と02については、埋土に含まれる遺物から、最終的な埋没時期を13世紀頃と考える。双方の遺構ともに位置的には各々東五坊大路東側溝および三条大路南側溝の想定場所にあるが、今回の成果だけこれらを条坊遺構と判断するのは困難である。

奈良時代の条坊側溝が、平城京が廃絶した後も水路や側溝として機能し続けている事例はいくつか知られている。今回検出したS D 01・02がそうした事例に該当するものであるのかどうかは、今後の周辺地域での調査成果なども考慮しつつ判断していく必要があろう。

(武田和哉)

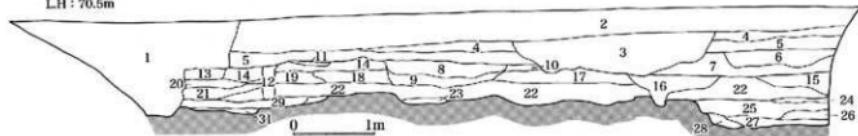
- 奈良県立龍源考古学研究所「平城京内の調査1、左京三条五坊十三坪の調査」『奈良県道跡調査調査報告1998年度(第一回)』1999
- 奈良市教育委員会「平城京左京(外京)東五坊大路の調査第394次」『奈良市埋蔵文化財調査報告書平成9年度(第2回)』1998

検出遺構一覧表

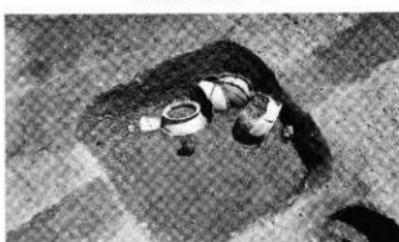
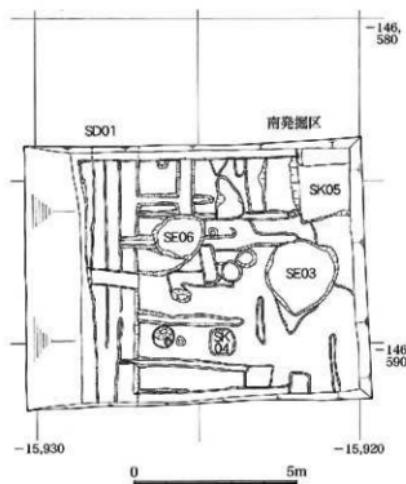
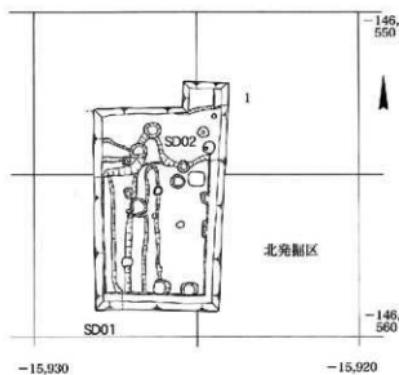
遺構番号	概形			深度 (m)	井戸枠 (m)	主な出土遺物	備考
	平面形	平面周長 (m)	深さ (m)				
S D 01	南北溝	長さ8.1以上、幅大約1.4	0.25			奈良時代の土師器・須恵器・墨書き器・鎌倉時代瓦器(13世紀)	
S D 02	東西溝	長さ4以上、幅大約1.8	0.2			奈良時代の土師器・須恵器・墨書き器・鎌倉時代瓦器(13世紀)	S D 01より新しい。
S E 03	ほぼ円形	東西・南北とも2.2	2以上			室町時代瓦器(16世紀)・地蔵石仏の破片	
S K 04	南北丸方型	東西・南北とも0.8	0.45			江戸時代羽釜(17世紀初期)	
S K 05	不整型	東西1.8・南北2.0以上	0.3				
S E 06	楕円型	東西1.2・南北1.5	0.1～0.4			近代以前のガラス・レンガ	

W -15,930
LH: 70.5m

-15,920 E



H J 第560次調査 南発掘区北壁土層図 (1/60)



H J 第560次調査 発掘区遺構平面図 (1/150)

11. 平城京跡（左京二条三坊十坪）の調査 第561次

事業名	宅地造成	調査期間	平成18年9月4日～9月12日
届出者名	株式会社エイジメント	調査面積	173m ²
調査地	奈良市法華寺町28他	調査担当者	安井宣也

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京二条三坊十坪の西寄りにあたり、現況は菟川の北に面した水田で、周辺では近年宅地化が進んでいる。十坪内における本格的な発掘調査は今回が最初で、坪内西寄りの様相の確認を主な目的として実施した。

II 基本層序

基本的には、水田耕作土（0.2 m）、同床土の灰色シルト質砂（2～3層あり、0.3～0.4 m）、灰色砂質粘土（0.2 m）の下に奈良時代の遺物包含層である黄灰色砂質粘土混シルト（0.1～0.2 m）があり、その下で沖積層の地山である黒褐色粘土質シルトとなる。水田床土の灰色シルト質砂・灰色砂質粘土の各層の上面には、乾田に特有の斑鉄がみられる。

ただし発掘区南辺では、水田床土の最上面を侵食する幅6 m、深さ0.3 mの流路があり、砂が堆積する。位置的にみて、菟川の氾濫によって生じたものとみられる。

奈良時代の遺構面は地山上面である。その標高は62.2～62.4 mで、北から南に緩やかに下る。

III 検出遺構

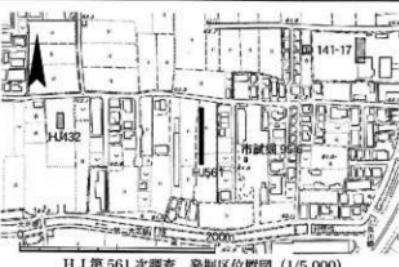
遺構検出は地山上面で行い、奈良時代の建物SB01～06と溝SD07を検出した。重複関係から、2時期以上の変遷が認められる。

SB01～06 概要是、次頁の表に示すとおりである。

SB01～04は南北柱列であるが、柱穴の形状・配置からみて、建物の一部と考えられる。SB01は東西棟建物の妻柱列と考えられるが、柱穴の一辺が0.4～0.6 mで比較的小さく、軒の可能性もある。SB02～04は4～5間でまとまるところから南北棟建物の側柱列と考えられ、特にSB02・04は柱穴の一辺が0.8～1 mと比較的大きいことから、その可能性が高い。SB05～06は、柱穴の配置と柱穴の一辺が0.8～1 mと比較的大きいことから東西棟建物の一部とみられる。

SB03～05は柱筋が揃うので同時期と考えられる。また、SB01・05及びSB03・06はそれぞれ位置が重複するので、同時併存はありえない。

SD07 発掘区南寄りで検出した幅1 m、深さ0.4 mの東西方向の溝。埋土は上層が地山の粘土ブロック層、



HJ第561次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

下層が黄灰色粘土質シルト層で、奈良時代の土器・瓦片と炭粒で構成された間層をはさむ。

IV 出土遺物

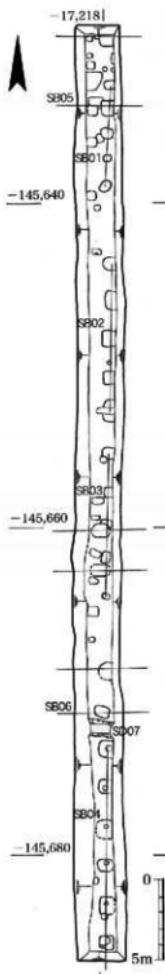
遺物整理箱8箱分がある。主なものは、奈良時代の溝SD07や奈良時代の遺物包含層から出土した土師器・須恵器と瓦類である。

土器 溝SD07から、土師器壺・壺A・杯A・杯B・杯C・皿A・高杯と須恵器壺・壺A・壺E・壺蓋・杯A・杯B・杯蓋・皿蓋・鉢Aが出土した。土師器杯Aは、体部内面に斜放射暗文、底部内面に連弧暗文が施される。皿Aは体部外縁及び内面全体がナデ調整である。これらは奈良時代中頃から後半の特徴を示す。（安井宣也）

瓦類 特筆すべきものに、奈良時代の遺物包含層から出土した二重郭紋軒平瓦がある。平城京内から出土する二重郭紋軒平瓦には6572型式A～Jの10種が知られているが、いずれとも異範である。郭線の断面形態はD・G・H種と同様の蒲鉾形である。郭線間の平坦面の幅はA・H種と同程度である。凹面の瓦当付近はココケズリを施す。顎面はココケズリを行い、顎部はココナデで丸く仕上げる。凸面平瓦部はタテケズリを施す。顎面端部付近には凹型調整台の圧痕が残る。なお、平城京内で段頭の二重郭紋軒平瓦の出土は珍しく、奈良女子大学構内



HJ第561次調査 二重郭紋軒平瓦 (1/4)



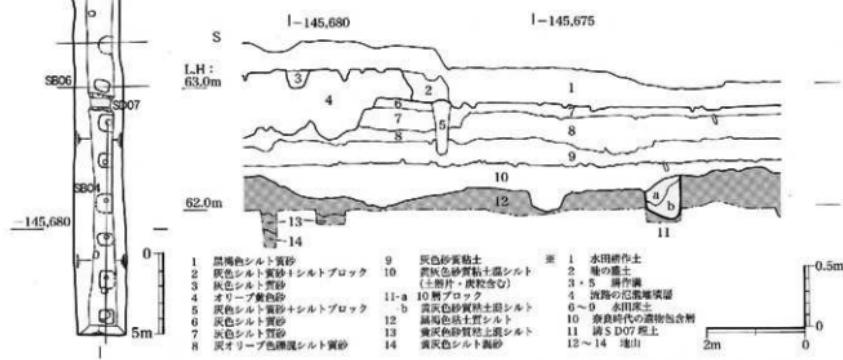
発掘区全景（南から）



発掘区全景（北から）

H J 第561次調査 検山遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模	柱行全長兼梁行全長		柱間寸法(m)	備考
			(m)	(m)		
S B 01	東西	梁行2間	6	—	3等間	妻柱列の可能性。
S B 02	南北	柱行4間	9	—	2.25等間	側柱列の可能性。
S B 03	南北	柱行4間	8.7	—	2.4 - 1.95 — 1.95 - 2.4	妻柱列の可能性。
S B 04	南北	柱行5間	12	—	2.4等間	側柱列の可能性。
S B 05	東西	—	—	4.2	—	柱穴の配列から推察。 S B 01と位置が重複。
S B 06	東西	南・北端各1回の可能性	—	11.1	—	柱穴の配列から推察。 北端: 2.4 南端: 2.7 S B 03と位置が重複。



H J 第561次調査 発掘区遺構平面図（左、1/300）、西壁土層図（右、縦：1/40、横：1/100）

遺跡出土品に次いで2例目である。（原田憲二郎）

V 調査所見

今回の調査の結果、十坪の西寄りは奈良時代中頃から後半にかけて宅地として利用されており、2時期以上の変遷があることがわかった。南北棟建物とみられるS B 02～04が柱筋をそろえて南北に並ぶことから、建物配置がコの字状であった可能性もある。

十坪にあたる地域では広い範囲で宅地化が進み、今後の大規模な調査があまり望めないなか、今回の調査では坪内の様相を断片的ながら把握できる成果を得ることができた。

（安井宣也）

1 坪／内蔵「Ⅲ 遺物 2 瓦・埴」『奈良女子大学構内遺跡発掘調査報告書』1995
2 坪／内蔵「Ⅲ 遺物 2 瓦・埴」『奈良女子大学構内遺跡発掘調査報告書』1999

12. 平城京跡（左京一坊・五条大路）の調査 第562次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成18年9月19日～10月7日
届出者名	個人	調査面積	173m ²
調査地	奈良市柏木町509-1	調査担当者	安井宣也

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では五条大路の路面で道路心の推定位置にある。北面の東西道路は大路の遺存地割で、東方の市HJ第405・415次調査地では、東西道路南側の水田でその南側溝が検出されている。

今回の調査は、五条大路の路面の確認を主な目的として実施した。

II 基本層序

水田耕作土(0.3 m)、同床土(0.6 m)の下で沖積層の地山となる。奈良時代の遺構面は地山上面で、その標高は56.4～56.5 mである。

III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、室町時代以降とみられる耕作溝・地割の段差や溝状の崖みを検出した。地山上面で14世紀頃の龍窓窓系の青磁碗片が1点出土した。

奈良時代の宅地に関連する遺構がなく、遺存地割及び周辺の調査で確認された五条大路南側溝の位置を考慮すれば、五条大路の路面(SF01)上と判断される。

IV 出土遺物

遺物整理箱8箱分ある。主なものに、水田床土等から出土した奈良時代の土師器・須恵器、軒丸瓦(6225型式F種・同種別不明)、軒平瓦(6711型式B種)がある。

V 調査所見

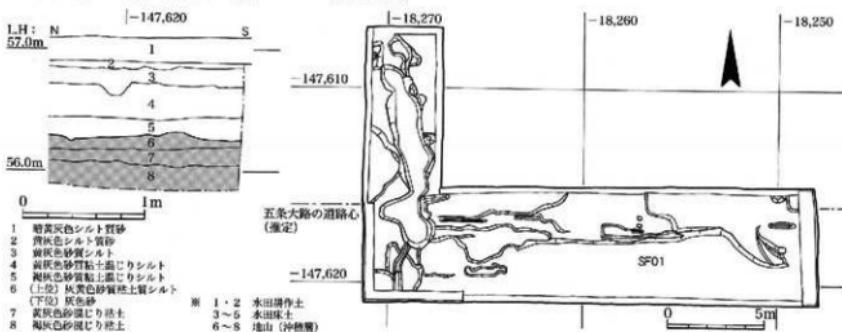
奈良時代の五条大路の路面SF01を確認した。本来の路面は後世の改変を受けている。
(安井宣也)



HJ第562次調査 発掘区位図(1/5,000)



発掘区全景(西から)



HJ第562次調査 発掘区東壁土層図(1/40)、発掘区造構平衡図(1/250)

13. 杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊一坪）の調査 第563次

事業名	第11号（杏中）市営住宅建替事業	調査期間	平成18年10月10日～11月30日
通知者名	奈良市長	調査面積	279m ²
調査地	奈良市杏町386他	調査担当者	久保清子

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では八条二坊一坪の南辺中央にあたる。一坪内では、今回の調査地の東側で、昭和62年度に市HJ第98次調査、平成元年度に市HJ第134次調査を実施しており、弥生時代の土坑と溝路、奈良時代の掘立柱建物・列、溝、土坑を検出している。調査地の西側では、平成元年度に市HJ第175次調査、平成2年度に市HJ第216次調査を実施しており、水田化以前は滞水した低湿地であったことが判明している。また、南隣の二坪においては、平成7年度市HJ第337・340次調査、平成15年度市HJ第500次の調査で、弥生時代の土坑、溝、古墳時代後期の方墳、奈良～平安時代の掘立柱建物・列、井戸、土坑が見つかっている。

今回、以上の調査成果を基に、弥生・古墳時代の遺構及び一坪内の様相を確認する目的で、敷地の南と北に2箇所、計279m²の発掘区を設定し、調査を実施した。

II 基本層序

発掘区内の層序は、北発掘区では、上から造成土(0.7m)、黒灰色粘質土(耕作土・0.2m)、灰色砂質土(旧耕作土・0.2m)と続き、地表下約1.1mで淡黄灰色粘土の地山となる。一方、南発掘区では、上から造成土(0.7m)、黒灰色粘質土(耕作土・0.2m)、灰色砂質土(旧耕作土・0.1～0.3m)、灰黄色粘土(0.3m)、灰色シルトと橙灰色シルトの混合土と続き、地表下約1.3～1.5mで淡黄白色シルト～細砂、褐色細砂、茶灰色砂の地山となる。地山上面の標高は、北発掘区で54.1m、南発掘区で53.5～53.7mであり、遺構はすべて、この地山上面で検出した。

III 検出遺構

検出遺構には、弥生時代後半～古墳時代初頭の溝1条(SD01)、奈良時代の掘立柱建物3棟(SB02～04)・掘立柱列1条(SA05)、土坑2基(SK06・07)、溝1条(SD08)、井戸4基(SE09～12)、平安時代の土坑(SK13)がある。

奈良時代の遺構は重複関係から2時期以上の変遷がある。井戸は、4基とも坪の南辺にある南発掘区で検出した。それ以外の奈良時代の遺構は、すべて北発掘区で検出した。

なお、奈良時代の調査地周辺の環境を調べるために、



HJ第563次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

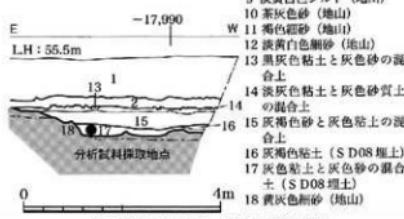
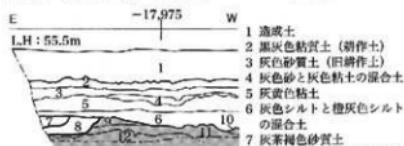
南北溝SD08の埋土中に包まれる花粉の分析を行った。
(134～136頁参照)

平安時代の土坑SK13からは、ほぼ完存する白磁碗が1点、正位置で出土した。

各遺構の詳細は、検出遺構一覧表の通りである。

IV 出土遺物

遺物整理箱8箱分の遺物が出土した。その内訳は弥生時代のサヌカイト製石器・楔形石器・網片、貝岩製及び緑色片岩製石包丁・弥生時代後半～古墳時代初頭の土器、奈良時代の土師器・須恵器、製塙土器、土製品、瓦壇、木製品、漆製品、平安時代後期の白磁碗、鎌倉時代の瓦器等がある。以下、主要なものについて記す。



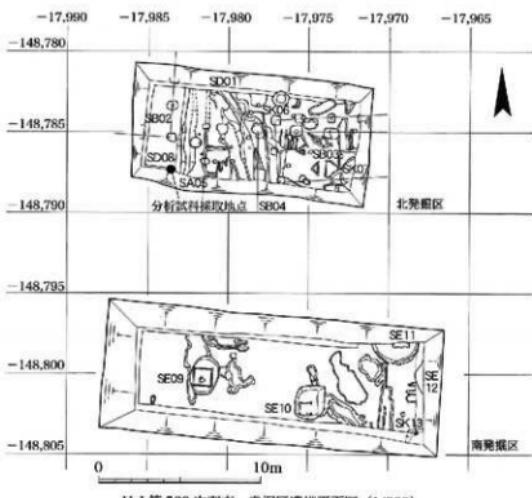
HJ第563次調査 発掘区断面図
(南発掘区(上)・北発掘区(下)) (1/100)



南発掘区全景（東から）



北発掘区全景（東から）



井戸 S E 10（北から）



井戸 S E 09（北東から）

H J 第563次調査 檜出遺構一覧表（井戸）

遺構番号	掘形			井戸枠	主な出土遺物・備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
S E 09	隅丸長方形	東西 1.75 南北 2.35	0.9 以上	方形縦板組 横枝留	（枠抜取部分）奈良時代中頃～後半の土師器杯か皿・皿・蓋・甕、須恵器杯か皿・甕、縄文時代の瓦器皿 （枠内）奈良時代中頃～後半の土師器杯・皿・蓋・甕、須恵器杯か皿・甕・横窓、文字焼、丸瓦、木製品 （掘形）赤生土器皿、奈良時代中頃～後半の上部器皿か皿・皿・蓋・甕、須恵器杯か皿・甕
S E 10	隅丸長方形	東西 1.8 x 南北 2.1	0.6 以上	方形縦板組 横枝留	一辺 0.7 （枠内）奈良時代中頃～後半の土師器皿・甕・須恵器皿・平瓦 （掘形）奈良時代中頃～後半の上部器皿か皿
S E 11	円形	東西 2.8 南北 1.3 以上	0.8 以上	方形縦板組 横枝留	東西 1.0 （枠内）奈良時代中頃～後半の土師器杯・皿・甕、須恵器杯か皿・皿・蓋・甕・漆器品 （掘形）弥生土器片、サヌカイト石歯、奈良時代中頃～後半の土師器杯か皿・甕・須恵器杯か皿・蓋・甕
S E 12	不明	東西 2.4 以上 x 南北 0.5 以上	1.0 以上		断面西端部分のみ検出。 （掘形）奈良時代の上部器皿・平瓦片

H J 第563次調査 検出遺物一覧表

通査番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	備考
S D 01	斜行講	長さ 7.0 以上、幅 2.7	0.4	弥生時代後半～古墳時代初期の土器高杯・壺・甕	S B 03・04・S K 06 より古い。
S K 06	不整形	東西 1.5 ～ 1.7 × 南北 4.2 以上	0.2	弥生土器壺・甕・瓦岩製石臼等、奈良時代の土器高杯・壺・甕・甕・甕	埋土中に炭化物多く含む。 S D 01・S B 04 より新しい。
S K 07	不整円形	東西 0.7 以上 × 南北 2.1	0.8 以上	サツカイト製滑石器、奈良時代の土器高杯・壺・甕・甕・甕	
S D 08	南北向	長さ 5.6 以上、幅 3.0 以上	0.2 以上	奈良時代の土器高杯・壺・甕・甕・甕	S B 02 より古い。
S K 13	不整方形	東西 1.2 以上 × 南北 1.5 以上	0.4	中国産白磁碗	平安時代後期。

通査番号	棟方向	規模 桁行 × 棟行 (m) × (m)	乗行全長 (m)	柱間寸法 (m)		備考
				桁行	棟行	
S B 02	不明	2 以上 × 1 以上	3.6 以上	1.8 以上	1.8	柱穴の深さ 0.2 m。
S B 03	東西	3 以上 × 2	5.1 以上	3.75	西から 1.5 ～ 1.8 ～ 1.8	北から 1.8 ～ 1.95
S B 04	東西	2 以上 × 1 以上	4.8 以上	2.7 以上	2.4	2.7
S A 05	南北	1 以上	2.1 以上		2.1	柱穴の深さ 0.2 m。

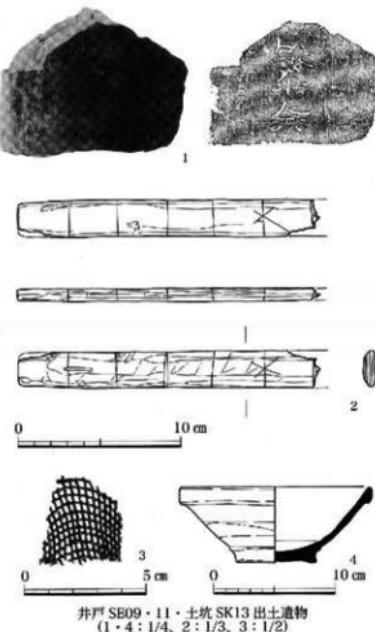
1は、SE 09 柱内出土の文字壺で、「□〔坂〕カ 本人万口」と人名とみられる文字がヘラ書きされている。現存長は、11.2cm、幅14.5cm、厚さ7.7cmである。2は、井戸SE 09 柱内から出土の木製のものさしである。細長い板の上面をやや甲高にして、上面に2.96～3.2cm、下面に2.8～3.1cmの間隔で刻線を入れていることから、1寸刻み尺とみら

れ、6寸目で折れている。5寸目にあたる刻線上にはさらに「×」の刻線があることから、本来の長さは10寸つまり1尺(小尺)にあたる30cm前後と推測される。現存長は18.6cm、幅2.2cm、厚さ0.8cmである。3は、奈良時代の井戸SE 11 柱内から出土した網状の漆塗製品で、類似のものが平城宮跡からも出土しており、その形状から漆紗冠の断片とみられる。4は、平安時代の土坑SK 13 から出土の12世紀中頃～後半頃の中國製白磁碗で、口縁が玉縁状であり、森田分類のIV類にあたる。

V 調査所見

今回の発掘区は、一坪の南端中央にあたる。調査の結果から坪の東半同様、坪の南辺に沿って井戸が設けられており、その北側に建物群があることがわかった。また、今回検出した井戸の柱内からは、奈良時代中頃から後半にかけての土器等とともに、ものさしや漆紗冠の断片とみられる網状の漆塗製品が出土した。これらは、平城京内の出土例がわずかであり、当時の度量衡や衣冠について知ることのできる貴重な資料といえる。

なお、南発掘区部分は、鎌倉時代に造構面が削平されている。人為的に地下げが行われたものとみられるが、調査地の西側及び東一坊大路のあった部分が水田化以前は低湿地であることから、こうした低い土地の埋め立て土に利用していた可能性がある。(久保清子)



14. 平城京跡（左京五条六坊二坪）の調査 第564次

事業名 済美小学校校舎建設事業
通知者名 奈良市長
調査地 西木辻町5-2

調査期間 平成18年10月16日～11月1日
調査面積 200m²
調査担当者 武田和哉

Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京五条六坊二坪の中央よりやや南西寄りの場所に該当している。調査地の周辺では、市HJ第333次・537次調査が実施されており、古墳時代の溝・土坑、奈良時代の柱穴や平安時代の井戸などが確認されている。

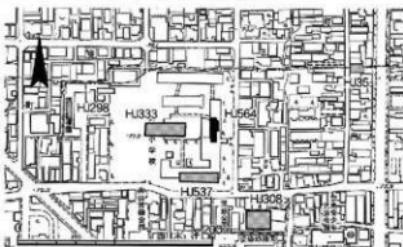
II基本層序

発掘区の大部分が旧校舎解体時に遺構面が削平されており、その際の造成土が1m以上に及んでいる。遺構面が残存している部分では、その下に校舎解体以前の造成土（約0.3m）、暗茶褐色土（0.1～0.15m=旧耕作土）、茶灰（淡茶灰）色土（約0.1m=旧床土）と続き、現地表下0.6～0.7mで黄褐色粘土（砂礫）の地山層に至る。地山上面の標高は70.0～70.1mである。

III検出遺構

検出遺構には、奈良～平安時代初頭の掘立柱建物2棟と掘立柱列2条がある。以下、主要な遺構について記す。

S B 01は発掘区の西側中央付近で検出した掘立柱建物。発掘区内では東西1間（約2.4m）、南北3間（7.2m）分を検出。北側に庇が付く建物と想定され、東・南へ続く。S B 02は、発掘区の西側中央付近で検出した掘立柱建物で、東西1間（約2.7m）、南北2間（4.8m）分を検出。S A 03は、発掘区西辺中央より南寄りで検出した南北方向の掘立柱列。発掘区内では2間（約3.0m）分を検出。建物の一部の可能性があり、その場合は更に南・西側へ続くとみられる。S A 04は、発掘区中央から南東寄りで検出した南北方向の掘立柱列。発掘区内では3



H J 第564次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

間（約4.5m）分を検出。建物の西側の柱列の可能性があり、その場合は更に東側へ続くとみられる。

今回の調査では、校舎解体時の擾乱が大きく、部分的な遺構検出に留まり、掘立柱建物や柱列の規模を確定できなかったが、遺構面が残存している部分では比較的遺構密度が高い様相が確認できた。また、柱穴の位置や状況等からみて、複数の時期の建物の存在が想定される。

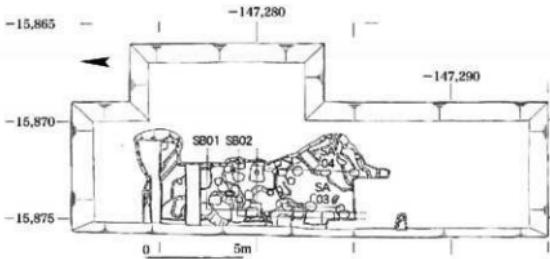
IV出土遺物

遺物は、遺物整理箱5箱分が出土した。大半を占める奈良時代後半～平安時代初頭（8世紀後半～9世紀初頭）の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦のほか、古墳時代（5世紀頃）の須恵器・土師器の破片も含まれており、近隣での調査成果とも合致する。

V調査所見

今回の調査では、残存している部分では遺構密度が高く、奈良時代の建物・柱列の重複等から、少なくとも3時期程度の遺構変遷が想定される。

（武田和哉）



H J 第564次調査 発掘区遺構平面図 (1/250)



発掘区中央部（西から）

15 平城京跡（左京三条四坊四坪）の調査 第566次

事業名	マンション新築	調査期間	平成18年11月7日～平成19年1月30日
届出者名	JR西日本不動産開発(株)・野村不動産(株)	調査面積	720m ²
調査地	大宮町三丁目 203	調査担当者	武田和哉

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条四坊四坪の北辺西隅付近に該当する。調査地周辺では過去に調査事例があり、奈良時代の掘立柱建物・堀などが検出されているが、北隣では中世に埋没する河川により遺構が破壊されており、本調査地での遺構の様相が注目された。

II 基本圖序

基本層序は、造成上(0.5~0.6 m)の下に、黒灰色粘土(耕土)、暗褐褐色土(床土)、淡青灰色砂、茶褐色粘土、灰褐色粘土等があり、地表下約1.0~1.1 mで青灰色または黄灰色シルトの地山に至る。地山は発掘区南東部分で良好に残存しており、それ以外は後述の河川により破壊されている。地山上面の標高は62.4 m前後である。

III 檢出遺憾

主要な検出遺構には、奈良時代の掘立柱列、平安時代初期の井戸、鎌倉時代以降室町時代後半までに埋没した河川跡、室町時代後半の土坑がある。このほか発掘区中央東寄り付近で掘立柱穴を数個検出したが、明確に建物としてまとまらない。以下、主要遺構の概要を記す。

S A 01 発掘区南辺の東寄りで検出した掘立柱列。東西1間(2.7 m)、南北1間(2.4 m)を検出。各柱穴は隅丸方形の掘形で径0.7~0.8 mと近似するが、深さは0.1~0.4 mと一様でない。L字形に曲がる様相から、建物の一端の可能性はある。奈良時代の土器片が少量出土した。

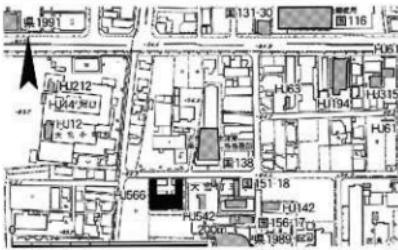
S E 02 発掘区の南東隅よりやや西側で検出した井戸で、掘形は平面円形を呈し、径は約2.1m。井戸枠は方形横板組隅柱留型で、横板は7段分、高さ約1.8mが残存する。掘形の深さは2m以上で、掘形から8世紀末の土器が縫内から8世紀末～9世紀初頭の土器が出土した。

河川 03 発掘区内を北東から南西へと流れる河川跡。東西約33m、南北約30m分を検出。深さは最深で約3.5m、埋土は複雑に分かれているが、その主体は砂礫地盤で構成されている。奈良～鎌倉時代の土器や瓦の片が出土。

SK 04 発掘区北東側の河川 03 上面で検出した土坑で、掘形は平面円形を呈し、検出面からの深さは約 0.7 m である。埋土から室町時代後半期の陶器片が出土した。

N 出土遺物

遺物整理箱7箱分が出土した。その内訳は奈良～平安



HJ 第566次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

時代前半の土師器・須恵器・綠釉陶器・墨畫土器（「大」カ）、軒丸瓦（6284 型式C種）・丸瓦・平瓦・面戸瓦・鎌倉時代の土師器・瓦器、室町時代後半期の陶器、輸入陶磁器（11～12世紀の白磁・14世紀の青磁）、時期不明のサヌカイト製石器・製塙土器・砥石・備羽口・津等である。

V 調査所見

本調査では、遺構面が残存する発掘区南東部で柱穴を検出したが、遺存状況が悪く建物としてまとめられない。

発掘区内を斜行する河川 03 は、調査地周辺での過去の発掘調査結果や地割の様相などとも併せて考察すると、調査地の北東から調査地付近へと至り、さらに南西方向に流れていたと推定される。

調査地の近隣では、北東方向に約300mの地点で実施した国第116次調査で、幅約15m、深さ約2mの河川跡が確認されている²²。規模等に差はあるが、この河川跡埋土にも中世の遺物が含まれており、地形的な様相とともに併せ考察すると、河川03の上流にあたる可能性が高い、双方とも中世に埋没した旧河道と考えられる。

調査地南東側の下流方面は、江戸時代の絵図に「添川」^{アシカワ}が描かれており、現在も道路下の暗渠として残る。現在の添川は河川03より小さい規模であるが、流域の一部が重複しており、河道の一部が江戸時代頃まで残存して、添川の一部となった可能性もある。(武田和哉)

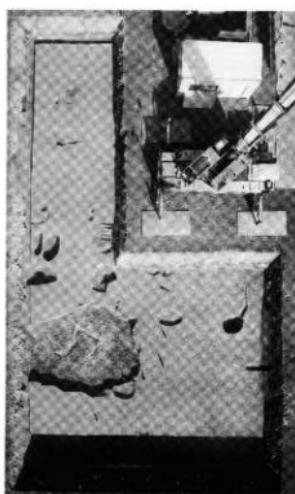
1) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京三条四坊四坪の発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1989 年度(第一分冊)』1990、奈良国立文化財研究所

所「左京三条四坊四坪の調査 第156-18次」『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1985、奈良国立文化財研究所「左京三条四坊三坪

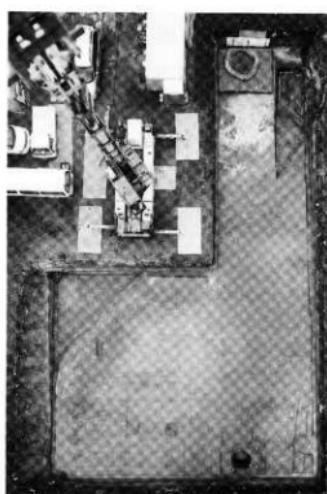
の調査 第138次』『昭和56年度平城宮跡考古掘削調査報告書』1982年
 2) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980年
 3) 「三條村領内絵図」三條典家組合『奈良三條村史』2006 年所収



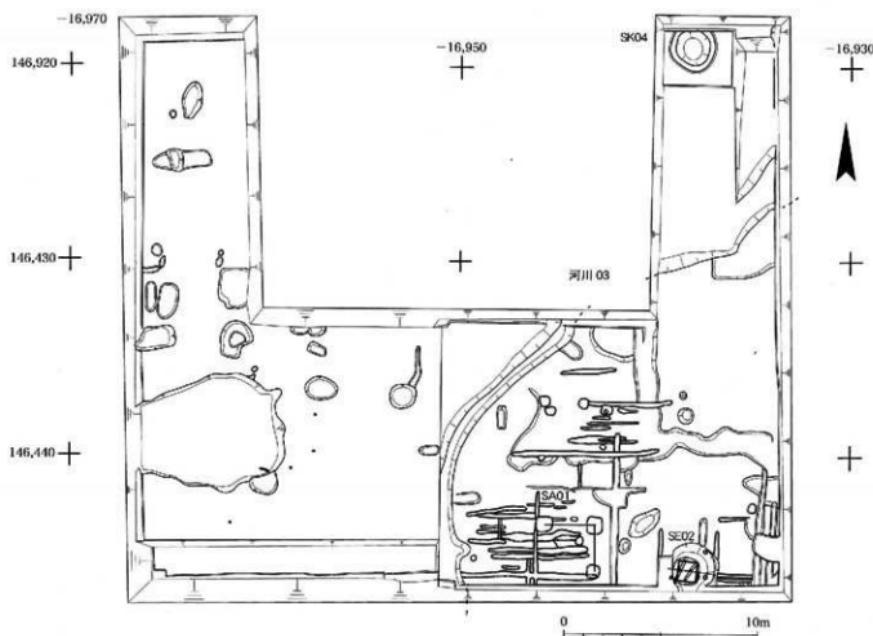
発掘区西南部・
河川03 剥削トレンチ



発掘区西半垂直写真



発掘区東半垂直写真



H J 第566次調査発掘区 遺構平面図 (1/250)

16. 平城京跡（左京六条一坊十五坪）の調査 第567次

事業名	宅地造成	調査期間	平成18年12月4日～12月7日
届出者名	(株)ホクシン	調査面積	30m ²
調査地	奈良市柏木町451番2	調査担当者	久保邦江 三好美鶴

1 はじめに

調査地は、条坊復原では左京六条一坊十五坪の西辺中央部分に相当する。同坪内では3箇所で調査例があり、市HJ第139次調査で東一坊坊間東小路及び同両側溝、市HJ第405次調査第3発掘区では六条条間北小路及び同両側溝、市史探第94-19次調査では奈良時代の柱穴、溝を確認している。また、調査地の北側の柏木遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓や、占墳時代中期の掘立柱建物・塀を確認している。本調査は坪内の様相並びに奈良時代以前の遺構・遺物を確認する目的で実施した。

I 基本層序

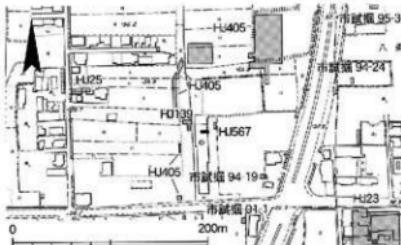
発掘区の基本層序は、造成土（0.6～0.7 m）、耕作土（0.2～0.3 m）、灰色砂と黄褐色粘土ブロック混合土（0.1 m）と続き、現地表下約0.9 mで明黄褐色粘土の地山となる。遺構検出は地山上面（標高55.8 m）で行った。

三 檢出遺憾

検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物 1 棟、柱穴、素掘りの溝がある。

掘立柱建物SB01は、発掘区西端で検出した。柱穴4ヵ所を確認し、その柱掘形は一边が約1m、深さは約0.9m、柱間は東西方向1.8m以上、南北方向1.5m以上で、總柱建物の一部であると考えられる。南西隅で検出した以外の柱穴で、柱の抜き取り痕跡を確認している。柱掘形および柱抜き取り痕跡からは弥生時代の石礎、奈良時代の須彌壇・土師壇片、平瓦片・丸瓦片が出土した。

発掘区中央北端で検出した柱穴P02は一辺が約1m、深さ0.9mの柱壠形である。SB01の柱穴と同規模で柱筋も描うが、別の建物の柱穴と考える。柱抜き取り痕跡から奈良時代の平瓦片が出土した。



III 第 567 次調查 穿掘區位置圖 (1/5,000)



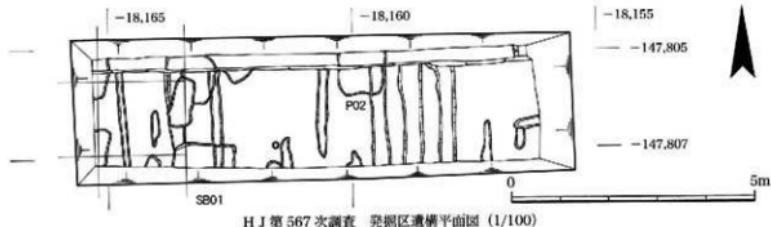
登録区全量（西から）

IV 出土遺物

弥生時代の土器片・石鏃（サヌカイト製・柳葉形）、奈良時代の須恵器片・土師器片・平瓦片・丸瓦片・瓦器の細片があるがその量は少ない。

V 調査所見

発掘区は十五坪の西端部分ではあるものの、比較的規模の大きな奈良時代の柱穴が検出された。弥生時代の遺物の出土は、柏木遺跡の広がりを検討する資料となると考える。(久保邦江)



17. 平城京跡（西三坊坊間路）の調査 第570次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成19年1月15日～1月31日
届出者名	個人	調査面積	101m ²
調査地	奈良市宝来二丁目809-1の一部	調査担当者	安井宣也

Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京三条三坊五・十二坪を画する西三坊坊間路の西辺付近にある。現状は水田で、東側の南北道路は坊間路の遺存地割である。

西三坊坊間路について、調査地の約150m北方において平成13年度に県が実施した調査で路面と東西両側溝が確認されている。²⁾

今回の調査は、西三坊坊間路の西辺付近の様相を把握することを目的として実施した。

II 基本層序

基本的には、水田耕作土(0.3m)の下に水田床土の黄灰色砂質シルト(2層あり、0.4m)、褐灰色砂質シルト(0.2m)、黄褐色シルト質砂(0.2m)があり、その下で台地を形成する灰黄色砂質シルトや灰白色砂質シルトの地山上面となる。ただし、水田床土のうち上から2層目以下の層(図中4～6層)は発掘区南端では堆積しない。地山上面には乾田に特有の斑駁がみられる。

地山上面は古墳～奈良時代の遺構面である。その標高は73.5～74.0mで、南から北へ緩やかに下る。

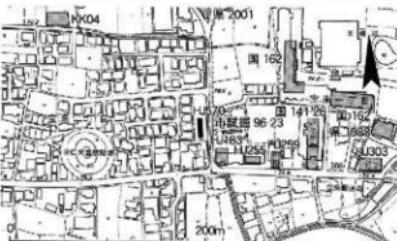
III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、古墳時代の溝SD01、奈良時代の西三坊坊間路西側溝SD02、同路面SF03を検出した。

SD01 幅0.2m、深さ0.1mの溝で、南東から北西に斜行する。埋土は黄灰色砂質粘土混じりシルトで、古墳時代前期の土師器残片が出土した。

SD02 幅約2m、深さ0.3～0.4mの南北方向の溝で、西二坊坊間路西側溝である。溝底は標高73.1～73.7mで南から北へ下っている。発掘区北端では東西1.0m、南北1.4mの平面幅円形で深さ0.9mの崖みがみられる。

- 1 黒褐色砂質シルト
- 2 黄灰色砂質シルト
- 3 褐灰色砂質粘土混じりシルト
- 4 褐灰色砂質粘土混じりシルト
- 5 褐灰色砂質シルト
- 6 黄褐色シルト質砂
- 7 灰色砂質シルト
- 8 灰褐色シルト質砂
- 9 黄灰色砂質シルト・粘土
- +10-11層ブロック
- 10 灰色砂質粘土混じりシルト
- 11 灰白色砂質シルト・粘土



N 出土遺物

遺物整理箱で10箱分あり、その内訳は、古墳時代の土師器・奈良～平安時代初頭の土師器・須恵器・施釉陶器・瓦類・鎌倉・室町時代の土師器・瓦器・瓦質土器・青磁等である。

溝SD01から出土した古墳時代前期の土師器甕は二重口縁で、山形系の特徴をもつ。

西三坊間路西側溝SD02から出土した土器には、土師器甕・壺B・杯A・皿A・皿C・高杯、須恵器甕・壺A・壺B・壺L・壺M・壺N・杯A・杯B・杯蓋・椀A・皿A・皿Cと製塙土器がある。土師器の椀Aや皿AはC手法で仕上げられたものが含まれており、8世紀後半～末頃の特徴を示す。

施釉陶器には、黄褐色シルト質砂（図中6層）から出土した9世紀前半頃の灰釉陶器皿片と、表土掘削時に出土した綠釉陶器の椀とみられる小片が各1点ずつある。

鎌倉・室町時代の土器は、水田床上から出土した。

V 調査所見

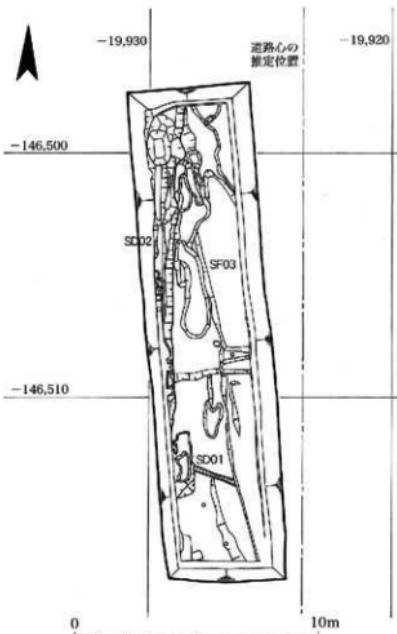
今回の調査で得られた成果は、以下の通りである。

- ① 古墳時代前期の溝が検出されたことから、調査地付近に同時期の遺跡が存在することがうかがえる。
- ② 奈良時代の西三坊間路の西側溝の溝底は南から北へ下る。北方の県の調査地では西側溝の溝幅が1.3～1.5m、深さが0.3mであるので、溝幅は本調査地のほうがやや広く、深さはほぼ同じである。
- ③ 埋土の下層が埋立て土の様相を示し、8世紀後半～末の土器片と瓦片を含むことから、8世紀末以降に埋められたことが推察される。
- ④ 西三坊間路の路面は後世の改変を受けている。発掘区内では南から北へ緩やかに下る。北方の県の調査地では路面の標高は73.3mで、発掘区北端とほぼ同じであることから、調査地の北端から北はかなり平坦であったとみられる。
- ⑤ 県の調査地における西三坊間路西側溝の溝心の座標値はX=-146,367.50m、Y=-19,928.60mである。今回の調査地との間における溝心の方眼方位に対する振れはN $0^{\circ}20'9''E$ と求められ、基本的に方眼方位北に対し西に振れる南北方向の道路心と反対の方向に振れるので、側溝心々間の距離が県の調査地(8.4m)よりも広がる可能性がある。
- ⑥ 東側の南北道路は、東側溝の位置を踏襲して造られた遺存地割と考えられる。
(安井宣也)

1) 奈良県立橿原考古学研究所「右京三条三坊六・十一坪の調査」『奈良県遺跡調査報告書 2001年度(第1分冊)』2002



発掘区全景（南から）



H J 第570次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)

18. 平城京跡（左京三条五坊十二坪）の調査 第571次調査

事業名	店舗新築	調査期間	平成19年2月5日～2月13日
届出者名	個人	調査面積	100m ²
調査地	奈良市油阪地方町8-1、油阪町2-3他	調査担当者	中島和彦

Iはじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京三条五坊十二坪の南辺中央に相当し、また中世の奈良市街地の西端にある。なお調査地は明治～昭和時代の出口池の池内にあることから、まず敷地全域に5箇所の発掘区を設定して試掘調査（市06-12次調査）を行い、その結果遺構面が残存する南東部分で発掘調査を行った。

II 基本層序

発掘区内の層序は、上から造成土（1～4）、盛土1～盛土3、耕作土（6）、暗灰色粘土層（10）で、地表下約1.2mで明青灰色粘土またはオリーブ灰色粘土の地山となる。地山上面の標高は約66.6mである。盛土2・3は、南側から埋められており、最終的に盛土1で埋められる。盛土2・3は、地山の粘土を多量に含む暗灰色粘土を主体とし、さらに細かく数層に分かれれる。盛土1と2の間および盛土2と3の間には薄い砂礫層があり、一時期の池の汀と考えられる。遺構検出は地山上面で行った。

III 検出遺構

土坑が7基ある。発掘区西辺の土坑SK01は東脇のみ検出し大半は発掘区外にある。試掘調査第5発掘区検出分を含め、東西4m以上、南北10m以上、深さ0.6m以上あり、底面は凸凹である。西側に一段落ちる土地の段差の可能性も考えられる。試掘第5発掘区部分で18世紀末以降の信楽産の陶器が出土した。

その他の土坑は、平面形が径約0.4mの円形のもの、東西8.6m、南北1.4m以上の不整形なものなど形はさ



HJ第571次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

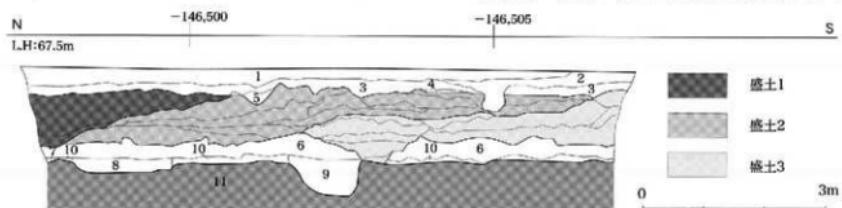
ままで、深さは0.1～0.6mあり、いずれも地山の粘土を含む暗灰色粘土で埋まる。これらの土坑からは8世紀頃の土師器、須恵器片が出土しており、それ以降の時期のものと考えられる。

IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱1箱、瓦片2点、種2点がある。土器は土坑・遺物包含層等から出土し、いずれも小片で、8世紀頃の土師器杯・壺、須恵器杯・壺、製塙土器、16～17世紀頃の土師器羽釜、17～19世紀頃の肥前産磁器碗・瓶などがある。

V 調査所見

今回の調査では、発掘区が近代の出口池内に該当するものの、その池底から奈良時代以降の土坑を検出した。出口池は17世紀前半に造られたとされ、17世紀中頃の「奈良絵図」にも描かれている。池は明治12年(1879年)の絵図までは、油阪町南側の道路(現在の大宮通り)と三条通り間の北半部に描かれ、発掘区周辺は池の外の



1 解体時造成土
2 茶褐色土(茶褐色沙質土)
3 黒褐色土(黒褐色土)
4 茶褐色土(茶褐色沙質土)
5 茶褐色沙質土
6 暗灰色粘土
7 暗灰色粘土(オリーブ灰色粘土含むSK03埋土)
8 暗灰色粘土(オリーブ灰色粘土含むSK05埋土)
9 暗灰色粘土(オリーブ灰色粘土含むSK06埋土)
10 暗灰色粘土(オリーブ灰色粘土含むSK07埋土)
11 オリーブ灰色粘土

HJ第571次調査 発掘区東壁上層図 (1/80)

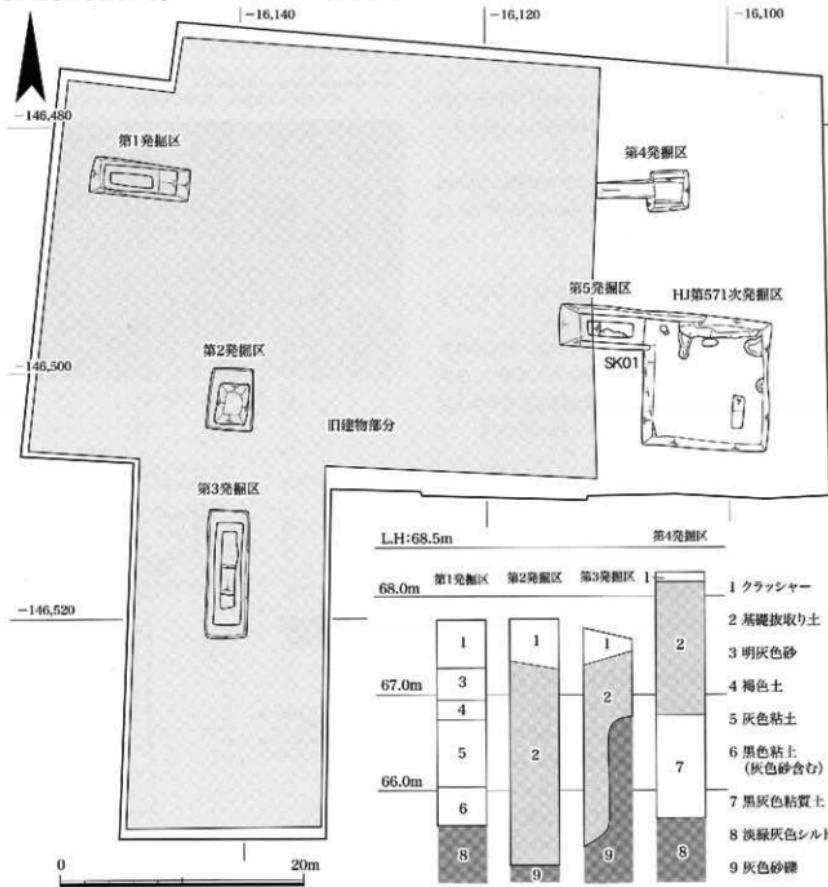
田畠が描かれている。しかし明治23年の「奈良町全図」では調査地は池内になる。こうしたことから、耕作土(6)は明治23年以前のもの、盛土2～盛土3は明治23年以後の池の南岸の堤の盛土、盛土1は戦後の出口池埋立に伴う盛土に該当するものと考えられる。

一方、遺構面の標高が約66.6mであることから、標高65.2～65.5mまで建物基礎が及ぶ試掘調査第2・3発掘区では、遺構面が削平されていることは明らかである。また、現代の池の堆土と考えられる黒灰色粘土層等が堆積し、耕作土層(6)に対応する層がない第1・4発掘区では、明治以降の出口池の浚渫で遺構面が削平されたものとみられる。

(中島和彦)



発掘区全景（東から）



HJ第571次調査・試掘第06-12次調査 発掘区遺構平面図(1/400)・土層柱状図(1/50)

19. 平城京跡（左京九条二坊十五坪）の調査 第572次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成19年2月13日～2月26日
届出者名	個人	調査面積	112m ²
調査地	奈良市西九条町二丁目11-5他	調査担当者	安井宣也

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京九条二坊十五坪の南西隅で、東二坊大路に面する場所にあたる。現状は倉庫用地で、旧状は水田である。すぐ南では平成2年度に市試掘第90-6次調査を実施し、奈良時代の井戸1基(S E 01)、小土坑・柱穴を検出している。

今回の調査は十五坪南東隅の様相の確認を主な目的として実施した。

II 基本層序

造成土(1.0 m)、水田耕作土(0.1 m)、同床土の灰色シルト混じり砂(0.3 m)の下で沖積層である暗オリーブ灰色砂混じりシルトの地山上面となる。

奈良時代の遺構面は地山上面で、その標高は53.9 mである。なお、水田床土の灰色シルト混じり砂中には17世紀以降の陶磁器片を含む。

III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、奈良時代の土坑SK 02と、江戸時代以降の土坑2基を検出した。

SK 02は東西0.4 m以上、南北0.4 mの平面円丸方形で、深さ0.1 m。埋土は灰黄褐色シルト質砂で、8世紀の土器片が出土した。江戸時代以降の土坑の埋土は水田床土と地山のシルト・粘土ブロックが混合する。

IV 出土遺物

遺物整理箱1箱分ある。主なものは奈良時代の土師器壺・壺B、須恵器杯、土馬、平瓦と16世紀末の信楽系陶器擂鉢、17世紀以降の肥前系陶磁器碗・皿で、いずれも小片である。奈良時代の土師器壺Bは土坑SK 02、土師器壺・須恵器杯は江戸時代以降の土坑、その他の遺物は水田床土から出土した。

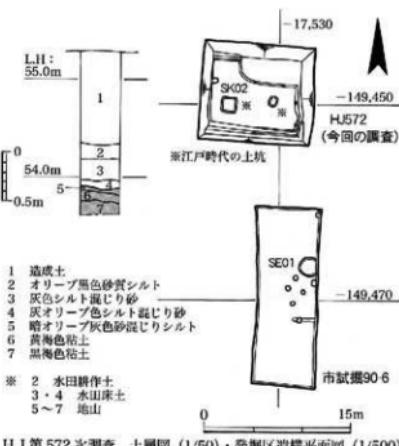
V 調査所見

市試掘90-6次調査の成果も踏まると、調査地付近は奈良時代には空闊地であったとみられる。

なお、調査地付近の東二坊大路の道路心の位置は、北東約500 mの市T I第25次調査地(平成11年度)の東三坊間路の道路心を基準とし、道路心の方眼方位の振れを朱雀大路と同じN 0° 15' 41"Wと仮定すると、概ねX = -149,450 m、Y = -17,502 mに求められ、西側溝の位置は敷地外東側と推察される。(安井宣也)



発掘区全貌（西から）



20. 平城京跡(左京四条三坊十五坪)の調査 第573次

事業名	マンション新築	調査期間	平成19年2月26日～3月23日
届出者名	株式会社ユニホー	調査面積	340m ²
調査地	三条栄町198-1他	調査担当者	武田和哉

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京四条三坊十五坪の中央より西へ寄った部分に該当する。当坪の東半部分については過去に調査事例があり、奈良時代の掘立柱建物・塀などの遺構が検出されている。一方、坪の西半部分での調査は今回が初めてであり、遺構の様相の把握を第一の目的として実施した。

II 基本層序

基本層序は、造成土(1.7～1.8 m)の下に、黒灰色粘土(水田耕作土)、暗灰褐色土(底土)、暗灰色土、暗黄褐色粘土質土(遺物包含層)、暗灰褐色土(遺物包含層)があり、地表下約2.5 mで茶褐色粘土もしくは淡黄灰色粘土の地山に至る。遺構検出作業は地山上面で実施した。地山上面の標高は、60.8～60.9 mである。

III 検出遺構

主要な検出遺構には、奈良時代の掘立柱列・建物・溝、性格不明遺構がある。以下、主要遺構の概要を記す。なお、遺構の規模などの詳細は次頁の表にまとめてある。

S A 01は、発掘区北辺で検出した東西方向の掘立柱列で、6間分を検出した。さらに発掘区外へ続く可能性がある。なお、北側にある柱穴と組み合わさり建物となる可能性もある。S D 02は、発掘区の北側で検出した東西方向の溝で、西に向かって徐々に浅くなり、発掘区西側では検出できない。前述のS A 01とは、約1.5 mの間隔で並行する。S A 03は、発掘区中央から北西寄りで検出した東西方向の掘立柱列で、2間分を検出した。さらに発掘区外西側へと続く可能性がある。S D 04は、発掘区中央から北西寄りで検出した東西方向の溝である。前述のS A 03の南に並行しており、発掘区中央付近から東では検出できない。S X 05は、発掘区東辺中央付近で検出した性格不明の遺構である。前述のS D 04の東側延長上付近に位置している。平面形は、東西方向の溝に似た様相を呈し、掘形の南北と北辺には板状の木材を立てていた。木材の内側には数箇所で木杭もしくはその痕跡が確認され、木材の固定に使用したとみられる。埋土から奈良時代の土器片が出土した。S A 06は、発掘区中央付近で検出した南北方向の掘立柱列である。S A 07は、発掘区中央から東寄りで検出した掘立柱列である。前述のS



H J 第573次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

A 06と並行する。S D 08は、発掘区中央から南寄りで検出した東西方向の溝で、数箇所で途切れる様相を呈する。S A 09は、発掘区南側で検出した東西方向の掘立柱列で、発掘区外西側へとさらに続く可能性がある。前述のS D 08とは約2 m程度の間隔で並行する。S B 10は、発掘区南辺で検出した東面庇付きの南北棟掘立柱建物で、発掘区外・南側へと続く。S B 11は、発掘区南西で検出した掘立柱建物で、発掘区外西側および南側へと続く。遺構の重複関係からみて、S B 10より新しい。

IV 出土遺物

遺物は遺物整理箱約5箱分が出土した。その内訳は、奈良～平安時代前半の土器・須恵器・製塙上器・転用鏡・土馬の破片・丸瓦・平瓦・道具瓦・壺、および時期不明の板材・縁羽口などである。

V 調査所見

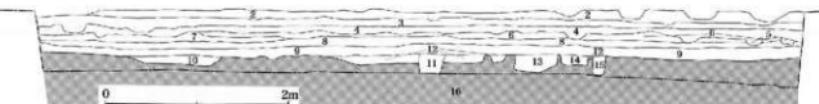
本調査で検出した遺構のなかで、柱列・溝とともに東西方向の遺構が大半を占めている。また、発掘区のほぼ中央付近には、他の箇所に比べて遺構の密度が低い部分が東西方向の帯状に拡がる。この部分は、十五坪の北端から坪内約三分の一の距離の位置に相当している。

これらのことから、遺構密度の低い部分は移動空間であった可能性が高く、東西方向の坪内道路が想定される。そして、その両側にある東西方向の溝は、坪内道路に付随する側溝の残存部分であって、さらに溝の外側に位置する東西方向の柱列は、坪内道路と宅地とを区切る閉塞施設の一部である可能性が指摘できよう。ただし、限られた発掘面積の中での所見でもあり、今後の周辺地域の調査成果の蓄積を待って再検討をしたい。(武田和哉)

-17,095

L.H : 63.5m W

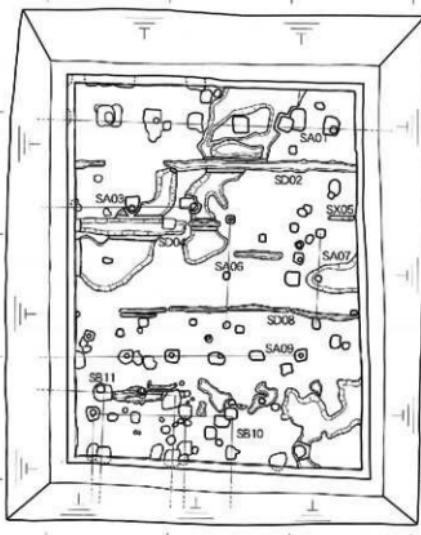
1



H J 第573次調査 発掘区上部土層図 (1/80)

-17,110 -17,105 -17,100 -17,095

- 1 造成土
- 2 黒褐色粘土(柱穴土上)
- 3 黒褐色土(柱穴土上)
- 4 黒褐色土(柱穴土上)
- 5 黒褐色土(柱穴埋土)
- 6 黒褐色土(柱穴土上)
- 7 黒褐色土(柱穴埋土)
- 8 黒褐色土質粘土(遺物包含層)
- 9 略灰褐色土(遺物包含層)
- 10 淡茶色粘土
- 11 略赤褐色粘土(柱穴埋土)
- 12 略赤灰粘土
- 13 略赤褐色土+灰色粘土(柱穴埋土)
- 14 灰色粘土(柱穴土上)
- 15 略灰色粘土(柱穴埋土)
- 16 黄灰色粘土(柱穴)



H J 第573次調査 発掘区遺構平面図 (1/200)

-146,720

-146,725

-146,730

-146,735

発掘区全景(北から)



発掘区北半部(東から)



発掘区南半部(西から)

H J 第573次調査 検出遺構一覧表

遺構番号	構造形態	軸間(間口) × 軸間(奥行) (m)			深さ (m)	主な出土遺物
		平面	面積 (m ²)	奥行 (m)		
S D 02	東西溝	長さ 7.8 以上、 幅 0.3 ~ 0.5	~ 0.15	0.1 ~ 0.15	会津時代の土器類・漆器類・ 丸瓦・平瓦	
S D 04	東西溝	長さ 6.0 以上、 幅 0.2 ~ 0.6	~ 0.15	0.05 ~ 0.15	会津時代の土器類・漆器類・ 丸瓦・平瓦	
S X 05	東西溝状	長さ 1.0 ~ 幅 0.2	~ 0.05	0.05	輪・祝村・奈良時代の土器類・ 漆器類	
S D 08	東西溝	長さ 6.0 以上、 幅 0.2 ~ 0.3	~ 0.1	0.05 ~ 0.1	会津時代の土器類・漆器類・ 丸瓦・平瓦	
遺構番号	構造形態	軸間(間口) × 軸間(奥行) (m)	面積 (m ²)	深さ (m)	参考	
S A 01	東西	6 以上	10.8 以上	1.8 等間	柱穴深さ 0.3 ~ 0.6 m,	
S A 03	東西	2 以上	4.8 以上	2.4 等間	柱穴深さ 0.4 m 前後	
S A 06	南北	2	4.5	2.25 等間		
S A 07	南北	2	3.6	1.8 等間	柱穴深さ 0.2 m,	
S A 09	東西	5 以上	9.0 以上	1.8 等間	柱穴深さ 0.2 ~ 0.4 m,	
S B 10	南北?	1 以上 × 2	1.5 以上	3.8	1.5 1.9 等間	廻廊の出 2.9 m, 柱穴深さを身 合 0.2 ~ 0.3 m, 間 0.3 m 施設
S B 11	南北?	1 以上 × 1 以上	3.0 以上	2.7 以上	3.0 2.7	柱穴深さ 0.4 ~ 0.5 m,

21. 平城京跡（左京八条三坊二坪）の調査 第574次

事業名	共同住宅新築	調査期間	平成19年3月13日～3月30日
届出者名	個人	調査面積	186m ²
調査地	奈良市西九条町一丁目2・6他	調査担当者	安井宣也・中島和彦

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京八条三坊二坪の西辺北寄りにある。西面の南北道路は、東二坊大路の遺存地割である。

二坪内における発掘調査は、今回が初めてである。今回の調査は、二坪内の西辺北寄りの様相の把握を主目的として、南北2箇所の発掘区を設定して実施した。

II 基本層序

南発掘区では、基本的に水田耕作土・床土（0.2～0.3m）の下で黄褐色砂質シルト・粘土の地山となる。地山上面は奈良時代から室町時代にかけての遺構面で、その標高は54.7mである。ただし、南発掘区の南・西辺と北発掘区の大部分は、水田耕作土・床土（0.2～0.3m）の下で後述する方形区画S X 09の濠の埋土となる。

III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、奈良～平安時代前期と平安時代末～室町時代の遺構を確認した。遺構の規模・形状等は、表に記すとおりである。

奈良～平安時代前期の遺構

南発掘区で、掘立柱柱1条（S A 01）・掘立柱建物2棟（S B 02・03）・土坑1基（S K 04）を検出した。

S A 01・S B 02の南部分は後述する方形区画S X 09の濠、S B 03の北の柱穴は後述する井戸S E 07によってともに破壊されている。S A 01とS B 02・S B 03とは位置が重複するので、同時併存しない。S B 02



H J 第574次調査 発掘区位置図 (1/5,000)

の柱穴の掘形埋土とS K 04の埋土から9～10世紀初頭頃の土器片が出上した。なお、東二坊大路の東側溝とそれに面する築地や塀の遺構は認められなかった。

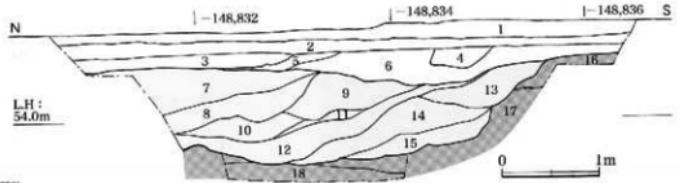
平安時代末～室町時代の遺構

溝3条（S D 05・06・10）、井戸2基（S E 07・08）、外周に濠が巡る方形区画の一部（S X 09）と小土坑群を検出した。

S D 05・06、小土坑群 南発掘区で検出したS D 05・06と小土坑の大半は、埋土中に12世紀後半～13世紀前半頃の瓦器片を含むことから、平安時代末～鎌倉時代頃のものと判断される。

S E 07・08 とともに南発掘区で検出した。

S E 07の掘形の底面は、湧水層の砂礫層を0.5m掘り下げている。井戸枠の抜き取り穴は摺鉢状で、東側に張り出し部分を伴うことから、井戸枠は東に倒して抜き



- | | | |
|----------------------|---------------------------|------------------------------------|
| 1 暗灰黄色シルト質砂 | 11 地山のシルト・粘土ブロック | 素 1・2 水田耕作土 |
| 2 黄灰色シルト質砂 | 12 黄褐色砂質じりシルト・粘土 | 3・5・6 水田床土 |
| 3 黄灰色シルト質砂 | 13 黄褐色シルトブロック | 4 耕作溝埋土 |
| 4 黒褐色砂質トルト | 14 暗灰黄色砂と黄灰色崩植混じり粘土のラミナ互層 | 7～15 S X 09 泥埋土
(9：土壙が崩れた土の可能性) |
| 5 地山のシルト・粘土ブロック | 15 黒褐色崩植混じり砂質シルト・粘土 | 16～18 地山 |
| 6 黑褐色砂質シルト | 16 黄褐色砂礫 | |
| 7 黑褐色砂質シルト・粘土 | 17 灰色砂質シルト・粘土 | |
| 8 暗灰黄色砂織じり砂質シルト | 18 灰色砂 | |
| 9 地山のシルト・粘土ブロック・瓦片含む | | |
| 10 暗灰黄色砂質シルト | | |

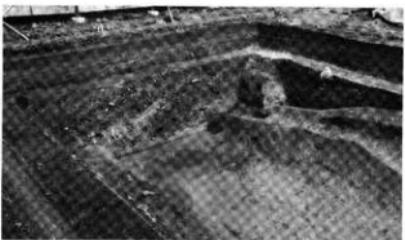
H J 第574次調査 北発掘区東壁上層図 (1/50)



北発掘区全景（西から）



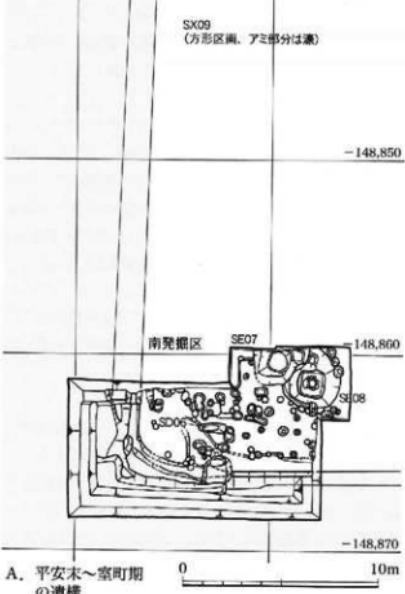
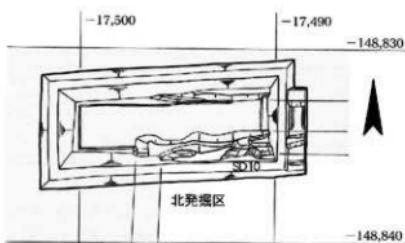
南発掘区全景（西から）



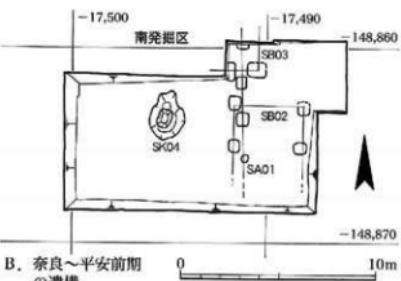
方形区画 S X 09 漆内埋土断面（北発掘区、北西から）



井戸 S E 08 (南から)



A. 平安末～室町期
の遺構



B. 奈良～平安前期
の遺構

H J 第574次調査 発掘区遺構平面図 (1/250)

H J 第574次調査 検出遺物一覧表

遺構番号	棟方向	規模	桁行全長	梁行全長	柱間寸法 (m)		備考
		(m)	(m)	桁行	梁行		
S A 01	南北	3以上	6.3以上	—	2.1等間	—	柱穴の深さ0.4m。 妻柱を欠く。柱穴の深さ0.2m。 柱穴から9世紀の上器が出土。
S B 02	南北	1以上×1	2.4以上	3.6	2.4	3.6	建物の南北隅部分。柱穴の深さ0.4m。
S B 03	不明	1以上×1以上	東西1.5以上	南北1.4以上	東西1.5	南北1.4以上	

遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物		備考
S K 04	不整円形	東西1.8×南北2.5	0.7	8世紀後半～9世紀の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器		
S D 05	東西溝	幅0.3、長さ2.6	0.2	12世紀後半～13世紀前半頃の土師器・須恵器・瓦器、12世紀の白磁		須恵器は束縛系の捏ね。
S D 06	南北溝	幅0.5、長さ1.5	0.4	12世紀後半～13世紀前半頃の土師器・瓦器		
S X 09	方形	南北30×東西5以上、濠の幅4.5以上	濠:1.0～1.2	16世紀後半の土師器・瓦質土器、16世紀末～17世紀の陶磁器、7-8世紀・12世紀以降の瓦（主に平瓦）		外周に濠を巡らす方形区画。
S D 10	南北溝	幅3.0、長さ1.3以上	0.8			S X 09 の濠に接続。

遺構番号	掘形		井戸枠		主な出土遺物・備考	
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	構造	内法 (m)	
S E 07	円形	直径1.1以上	1.8	円形枠組の可能性		枠は抜き取られている。抜取り穴から12世紀後半～13世紀の土器片が出土。
S E 08	隅丸方形	一辺1.4以上	1.6	円形石組の可能性		枠は抜き取られている。水槽あり。抜取り穴から14世紀後半～15世紀前半の上器片が出土。

取られたとみられる。抜き取り穴から出土した土器の時期から、13世紀前半頃に廃絶したと考えられる。

S E 08は、重複関係からS E 07より新しい。掘形の底面は湧水層の砂疊層上面で、水溜部分はさらに0.4m掘り下げて内部に曲物を据える。水溜部分の周囲には平面円形の石組みの残欠がみられる。井戸枠の抜き取り穴は摺鉢状である。位置関係や重複関係から、S E 07を造り替えた井戸枠とみられ、抜き取り穴から出土した土器の時期から、15世紀前半頃に廃絶したと考えられる。

S X 09・S D 10 方形区画 S X 09は、南発掘区で区画の南西隅と濠、北発掘区で区画の北西隅と濠を検出した。濠の底面は平坦である。埋土は主に暗灰色の粘土やシルト・砂互層で、滞水していたことがわかる。北発掘区では、埋土の上位に区画側の岸に沿って地山のシルト・粘土・ブロック層（土層約9層）があり、位置的にみて区画の外縁に沿って土器が築かれていたことが推察される。濠の出土遺物の時期から16世紀後半に形成され、17世紀中頃までに廃絶したと考えられる。

S D 10は北発掘区南端で検出された南北溝。S X 09の区画内に掘削され、濠に接続する。埋土は濠の埋土と連の暗灰色の粘土やシルト・砂互層である。

N 出土遺物

遺物整理箱49箱分出土した。その内訳は、上器・土製品が30箱、瓦類が15箱、木製品等が4箱である。

土器・土製品

(1) 奈良～平安時代前期（8世紀～10世紀）

土器には、土師器壺・壺・杯・椀・皿・杯蓋・高杯、須恵器壺・壺・壺蓋・杯・杯蓋・高杯、黒色土器A類杯、縄釉陶器（椀の可能性）、灰釉陶器椀・皿がある。また、土製品には土馬、ミニチュア壺がある。主に土坑S K 04や方形区画S X 09の濠から出土した。

土坑S K 04から出土した皿Aは内面ナデ調整で、平城宮IVの段階以降とみられる。建物S B 02の柱穴の掘形堆土から出土した黒色土器A類杯は底面に高台が付く、土師器皿はe手法で調整される。ともに9世紀後半～10世紀初頭頃のものとみられる。縄釉陶器と灰釉陶器はいずれも9～10世紀頃のものとみられる。

(2) 平安時代末～室町時代（12世紀～16世紀）

在地土上器・広域流通品・貿易陶磁器に大別できる。主に濠S D 05・06の埋土、井戸枠S E 07・08の井戸枠抜き取り穴や方形区画S X 09の濠から出土した。

在地土上器 上器羽釜・皿、瓦器椀・皿、瓦質土器

深鉢・浅鉢・壺鉢・捏鉢・蓋・羽釜・土管がある。

土器は、① 12世紀後半～13世紀頃、② 14世紀後半～15世紀前半頃、③ 16世紀後半頃の概ね3時期に大別できる。②の皿には胎土の色調が白色系と赤色系のものがある。③の羽釜は菅原正明の分類で大和I型が多く、方形区画S X 09の濠から多量に出土した。

瓦器は12世紀後半～13世紀後半のもので、川越俊²の編年で第III段階A～C型式の様相を示す。

瓦葺上器の深鉢は口径25～30cmの大型品を含み、壺鉢は口縁端部内面が内傾する16世紀頃のものが多い。

広域流通品 13世紀初頭と14世紀前半頃の東播系須恵器の捏鉢、14世紀後半～15世紀前半頃の常滑焼の壺、16世紀の備前焼の壺・徳利、16世紀後半～末頃の信楽系陶器の捏鉢がある。

貿易陶器 白磁と青磁がある。白磁には、12世紀頃の碗・皿・壺と16世紀頃の皿がある。碗は、横田賢次郎・森田賀の分類でⅣ縁部が玉縁状のIV類が多い。青磁には、12世紀頃の同安窯系や龍泉窯系の碗・皿がある。龍泉窯系の碗は、横田・森田の分類でI類が多い。

(3) 江戸時代初期（17世紀）

方形区画S X 09の濠から、肥前系陶磁器と瀬戸・美濃系陶器が出土した。

肥前系陶磁器 陶器には碗・皿がある。大橋康³の編年でII期（17世紀前半）のものが多いが、見込み部分に胎土口積みの痕跡を残すI期（16世紀末）や、全体に施釉するIII期（17世紀後半）のものもある。I・II期のものは内面と体部上半の外面に灰色、緑色や褐色の釉を施す。器皿には大橋の編年でII期（17世紀前半）頃の碗・皿がある。碗は染付である。皿は青磁で見込み部外辺の釉を剥ぐものがI点ある。

瀬戸・美濃系陶器 藤澤良祐の編年で大業第4段階（16世紀末～17世紀初頭）頃の特徴を示す碗・皿がある。碗は天目茶碗形で、高台部の外面を除き全体に鉄釉を施す。皿は折縁皿で、高台部の外側を除いて黄灰色の釉を施す。体部内面に花弁・見込み部中央に花の文様の丸彫りを施すものと、そうでないものがある。

瓦類

方形区画S X 09の濠から、飛鳥時代・奈良時代と平安時代以降の瓦片が出土した。軒瓦と丸・平瓦があり、平瓦が大半を占める。軒平瓦には、7世紀後半の重弧文軒平瓦、8世紀の6712型式A種・6716型式C種がある。平瓦には、内面にヨコナナデ調整模、両面に布リ丘痕と模骨痕が残る7世紀後半のもののが少數ある。

大半が平瓦で時期幅があることから、土塁の構築材と

して再利用された可能性がある。

木製品

井戸S E 08の水溜めに据えられた曲物や、方形区画S X 09の濠から出土した漆器椀・曲物底板等がある。

V 調査所見

今回の調査で得られた成果は、以下の通りである。

① 奈良時代後半には二坪の西辺北寄りは宅地となっており、平安時代前期まで存続した。その後、平安時代末に調査地一帯で集落が成立し、江戸時代初期まで存続していた。

② 調査地付近における東二坊大路の道路心の位置は、南東約300mの市T I第25次調査地の東二坊間路の道路心を基準とし、方眼方位に対する振れを朱雀大路と同じN 0° 15' 41"Wと仮定した場合、X = -148,835m、Y = -17,505mに求められる。

奈良時代の遺構で最も西寄りにある土坑S K 04が道路心の約9m東にあることから、道路側溝を含む大路の最大幅が18mを越えることはない。また、道路心の位置が大路の遺存地割である南北道路の東端及び方形区画S X 09の濠の西縁にあたることから、南北道路が大路の道路心の位置をほぼ踏襲し、室町時代末の16世紀後半頃には存在したことか推察される。

③ 室町時代末に形成された方形区画S X 09は、天理市の菅田遺跡で確認された室町時代後期の濠を伴う方形区画（東西50～60m×南北130m、濠の幅8m）や安堵坊にある環濠屋敷の中氏邸（東西75m×南北40～50m、濠の幅8m）と形状が似ている。

菅田遺跡では、鎌倉時代に成立した集落内が在地領主の菅田氏の居館と一般構成員の家屋群に分離されており、室町時代後期に居館の周囲に濠が掘削されて区画が成立する。区画の施設時期は江戸時代初頭で、存続時期が方形区画S X 09とほぼ重複するほか、濠の出土遺物の様相も似ている。また、中氏邸は室町時代の在地領主の中氏の居館である。

以上の点を勘案すれば、方形区画S X 09は在地領主である辰市氏の居館の可能性もある。（安井宣也）

- 1) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」 文化財論叢 奈良国立文化財研究所 1983
- 2) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる一、三の問題」 文化財論叢 神奈川県立文化財研究所 1983
- 3) 横田賢次郎・森田他「大字附出土の輸入中國陶磁器について」 九州歴史資料研究紀要 4 1978
- 4) 大橋康二「肥前陶器」 考古学ライブラリー 55 ニューサイエンス社 1989
- 5) 藤澤良祐「瀬戸・美濃大業編年」 再検討（財）瀬戸市埋蔵文化財センター記要 2002
- 6) 奈良県立橿原考古学研究所編「青川遺跡」 2000
- 7) 石田貴典・岡田英男「中家の魅力」 向陽書房 1988

22. 平城京東市跡推定地・東堀河の調査 第33・34次

事業名	33・34次：共同住宅新築	調査期間	33次：平成18年10月10日～11月1日
届出者名	33・34次：個人		34次：平成18年11月27日～12月22日
調査地	33次：奈良市東九条町440-1の一部他 34次：奈良市東九条町442-1の一部	調査面積	33次：204m ² 、34次：122m ²
		調査担当者	安井宣也

I はじめに

第33次調査地は、東市跡推定地の北東部を占める左京八条三坊十一坪の北西部にある。また、第34次調査地は第33次調査地のすぐ東で、坪内を南北に貫流する東堀河上にあたる。現状はともに水田で、後者は東堀河の遺存地割として認識できる。

調査地周辺では過去に3件の発掘調査が実施されている。調査地の北西で実施した市T1第2次調査（昭和57年度）では、十一坪の北を画する八条条間路の南・北側溝、南寄りで複数の掘立柱建物・塀が確認された。また、北東で実施した市T1第4次調査（昭和58年度）では、八条条間路と東堀河が交差する箇所に9世紀中頃まで木橋が架かっていたことや、東堀河の西岸沿いに南北方向の掘立柱塀が築かれていたことが確認された。東堀河SD017の埋土は上層（9世紀末までに堆積）・中層（9世紀前半に堆積）・下層（8世紀後半～末に堆積）の3層に大別でき、8～10世紀前半頃の土器・瓦類・木製品・金属製品などが出土した。

第33次調査は十一坪北西部の土地利用の様相の把握を目的として、第34次調査は東堀河内の状態と埋没過程の把握を目的として、それぞれ実施した。なお、遺構番号は東市跡推定地内で付している通し番号である。

II 第33次調査の概要

1 基本層序

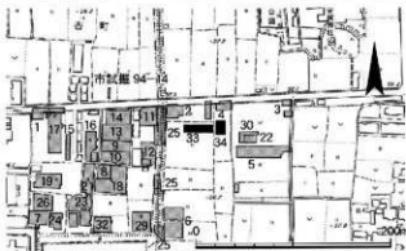
水田耕作土（0.2m）、水田床土（2～3層あり、0.3m）の下で、沖積層である灰オリーブ色砂質粘土混じりシルトや灰色砂礫の地山となる。奈良時代の遺構面は地面上で、その標高は56.8mである。

2 検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、奈良時代の掘立柱建物3棟（S B 564～566）、掘立柱塀2条（S A 567・568）、土坑8基（S K 569～576）を検出した。概要是、表に示すとおりである。

掘立柱建物・塀 発掘区西半部でみられる。

S B 565とS A 567、及びS B 566と土坑S K 571とは位置が重複するため、同時併存しない。S A 568は重複関係からS B 566より新しく、後述する土坑S K





T I 第33次調査 発掘区全景(西から)



T I 第33次調査 発掘区全景(東から)



T I 第34次調査 発掘区全景(北から)

片を含む。下層(同12層)は粘土質シルトブロックを含み、埋立て土の様相を示す。

②層は、沼地の堆積層の様相を示す。上位は粘土が主で、10世紀前半頃の土器片を含む。下位はシルト・砂互層で、9世紀前半頃の土器片とウシやウマの骨も含む。

③層は、州を形成する砂礫と州に沿う流路内に堆積したシルト・砂で1対となる層が、腐植を含む灰色砂質粘土混じりシルトの間層(同中16層)を挟んで上下2層(上:同中14・15層、下:同17・18層)識別できる。全体に8世紀中～後半頃の土器・瓦類が多く含み、木片、モモ核やウリ等の種子、ウシやウマの骨も含む。

なお、底面は青灰色砂質シルト混じり粘土の地山に達する。その標高は54.6～54.9mで、前述した第33次調査地の奈良時代遺構面からの深さは1.9～2.2mである。

2 出土遺物

遺物整理箱で18箱分があり、大半が東堀河SD017から出土した土器・瓦類である。主なものを記す。

SD017 ②層出土遺物 上位では10世紀前半頃の土師器皿・黒色土器A類杯の小片が出土した。土師器皿はc手法で調整され、口縁部は外反する。下位では9世紀前半頃の綠釉陶器碗の底部片1点が出土した。

同 ③層出土遺物 土器・土製品には、8世紀中～後半頃の土師器・須恵器・黒色土器A類・綠釉陶器と土馬、埴堀がある。

土師器には、壺・壺B・杯A・杯B・碗A・皿A・高杯・瓶・壺等がある。杯Aや皿Aは、上層で出土したものは体部の内面にヨコナデ、外面全体にヘラケズリを施し、平城宮V・VIの段階の様相を示すが、下層で出土したものは体部内面に斜放射暗文を施し、平城宮III・IVの段階の様相を示す。壺Bには人面を墨書きしたものもある。瓶と壺には小型の模造品もある。

須恵器には、壺・壺A・壺L・壺M・杯A・杯B・杯蓋・皿A・皿C・高杯等がある。杯Bや杯蓋には硯に転用したものがある。壺には東海系のものもある。

黒色土器A類には杯と碗があり、上層で少量出土している。杯は底部内面に螺旋暗文を施す。碗は内面にヘラミガキ、外面全体にヘラケズリを施す。綠釉陶器は、碗の底部片1点が上層で出土している。

瓦類には丸・平瓦と博がある。また、下層で斎串が1点出土している。

V 調査所見

第33・34次調査で得られた所見は、以下の通りである。

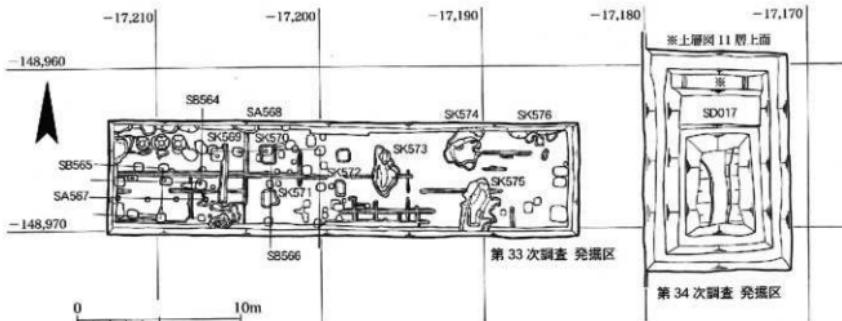
① 十一坪の北西部では、東堀河の西岸から17～18mの空閑地を隔てて建物が建てられており、遺構の重複関係から3時期以上の変遷が認められる。

② 東市跡推定地で初めて発見された建物(SB564)を確認した。

③ 東堀河SD017は、8世紀中～後半頃に付近の河川から砂礫が流入して堆積し、9～10世紀前半頃にかけて沼地になった後、耕地化に伴い次第に埋め立てられ、13世紀前半頃には埋没している。

④ 東堀河SD017の埋土については、層相や出土遺物の時期を考慮すれば、今回の調査地の②層上位が第4次調査地の上層、②層下位が同中層、③層が同下層とそれぞれ対応すると判断できる。

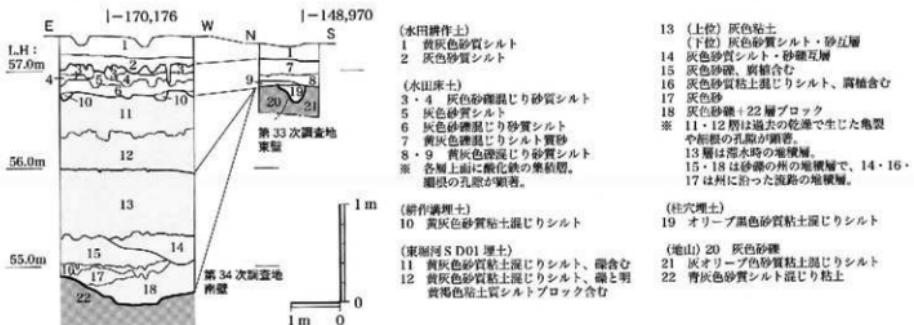
(安井宣也)



遺構番号	棟方向	規模	桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m) 桁行	備考
		桁行×梁行				
S B 564	東西	2以上×1以上	5.1以上	2.1	東から2.4 -2.7	柱穴深さ0.5～0.6m。型廻据付旗を伴う。
S B 565	東西	1以上×1	1.65以上	3.0	1.65	柱穴深さ0.1～0.3m。S B 564・S A 567と併存しない。
S B 566	南北	2以上×2	4.5以上	3.0	2.25等間	柱穴深さ0.3～0.4m。S K 571と併存しない。
S A 567	東西	3以上	5.4以上	-	1.8等間	柱穴深さ1.0m。
S A 568	東西	2	3.3	-	1.65等間	柱穴深さ0.3～0.4m。S B 566より新しくS K 570より古い。

遺構番号	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	備考
S K 569	長方形	東西0.5×南北3.6	0.2	8世紀の土師器・須恵器、平瓦	埋土：暗灰黄色砂質シルト+地山シルトブロック。
S K 570	丸丸方形	東西0.9×南北1.2	0.2	8世紀の土師器・須恵器	埋土：暗灰黄色砂質シルト+地山シルトブロック。
S K 571	丸丸方形	東西1.1×南北1.1	0.2	8世紀の土師器・須恵器、平瓦	埋土：暗灰黄色砂質シルト。
S K 572	丸丸方形	東西0.6×南北0.9	0.3	8世紀の土師器・須恵器、平瓦	埋土：灰色砂質シルト+地山シルトブロック。
S K 573	不整形	東西1.6×南北3.1	0.1	8世紀の土師器	埋土：暗灰黄色砂質粘土+地山シルトブロック。
S K 574	不整形	東西2.2×南北2.6	0.2	8世紀の土師器・須恵器、土馬、電丸瓦	埋土：暗灰黄色砂質粘土+地山シルトブロック。
S K 575	不整形	東西2.5×南北3.2以上	0.3	8世紀の土師器・須恵器、平瓦	埋土：暗灰黄色砂質シルト+地山シルトブロック。
S K 576	不整形	東西4.0×南北0.7以上	0.3	8世紀の土師器・須恵器	埋土：暗灰黄色砂質シルト。

T I 第33・34次調査 発掘区遺構平面図 (1/300)・遺構一覧表



T I 第33・34次調査 土層図 (縦: 1/50、横: 1/100)

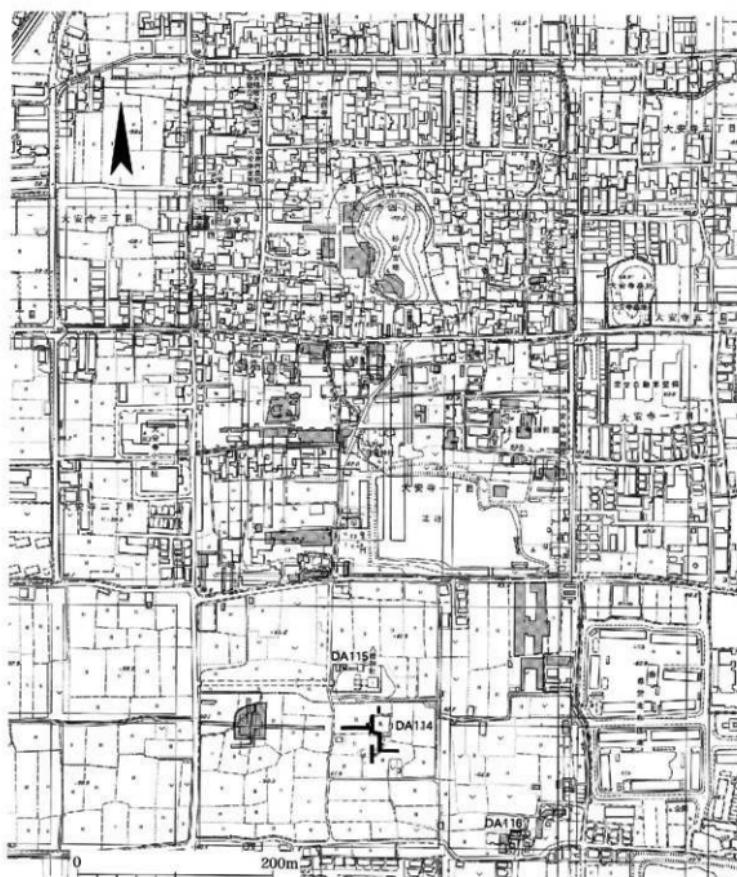
23. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 18 年度に、史跡大安寺旧境内において計 3 件の調査を実施した。第 114 次調査は「塔院地区」の保存整備事業に係る発掘調査であり、今年度は東塔地区の調査を行った。

また、第 115 次は八幡神社の施設改築、第 116 次は個人住宅新築に伴う現状変更許可申請に係る発掘調査で、いずれとも条件付き許可となったものである。

平成 18 年度史跡大安寺旧境内の調査 発掘調査一覧表

遺跡名	調査次数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
史跡大安寺旧境内	DA 114	保存整備事業	東九条町 1322 他	H 18.10.27 ~ 12.27	370m ²	松浦・秋山
史跡大安寺旧境内	DA 115	神社施設改築	東九条町 1316	H 18.12.4 ~ 12.6	5m ²	原田香
史跡大安寺旧境内	DA 116	個人住宅新築	東九条町 1373-4	H 19.2.19 ~ 2.28	10m ²	池田裕



史跡大安寺旧境内の調査 発掘区位置図 (1/5,000)

(1) 東塔地区の調査 第114次

I はじめに

これまで、史跡大安寺旧境内保存整備事業に係る発掘調査として、平成13年度から17年度にかけては西塔跡の調査を行なってきたが、本年度は東塔基壇の規模確認を主目的に、東塔跡周辺の確認調査を行なった。

東塔跡については、昭和49年に現土壇の擁壁工事に際して小規模な調査が行なわれておらず、土壇南西側に基壇化粧の一部（延石）が確認されている。このことから、現在の擁壁ブロックで囲まれた土壇が東塔基壇とほぼ一致すると推定されていた。

今回の調査では、東塔跡の現状をなるべく維持するため、土壇から外側にかけて調査区を設定した。第1発掘区は土壇南側に、基壇南辺および塔の回繞施設の確認を目的として設けた。第2発掘区は土壇西側に、基壇西辺および回繞施設の確認を目的として設けた。第3発掘区は土壇北側に、基壇の南北長確認のため設けた。第4発掘区は塔跡の南西20mほどのところに鳥居に残る、東西に長い高まり部分（以下、南北マウンド）の確認を目的として設けた。

II 基本層序

擁壁で囲まれた現土壇以外、周囲は概ね水田となっており、旧地形はその耕作によって削平されている。そのため、西塔跡で見られたような塔の崩落による堆積物はほとんど残っていない。唯一、厚い堆積層が残っていたのは南側の畠地になっていた部分で、南北マウンドから塔跡へ続く高まりとなっている。塔跡周囲の堆積層はこの南側部分を除くと、第1発掘区南東部で地山と耕作

土の間に薄い砂質の遺物包含層がある以外は、概ね水田耕作土直下が黄灰色粘土の地山となる。

南側に残る堆積層の基本層序は、現地表に黒灰色の耕作土および腐植土が0.1～0.15mあり、この下に近～現代の掘り込みがある。以下、瓦を多量に含む黒色～暗赤色の炭混じり焼土が0.2m前後、明黄色～暗黄色土が0.15～0.3m、暗黄色粘土質土が0.1m前後、暗黄色シルト質土が0.15m前後、濁灰黄色砂混土質土が0.1m程度、濁暗黄色砂礫混シルト質土が0.15m程度で黄灰色礫混粘土の地山に至る。また、階段部分には盛土と考えられる、褐灰色土、暗褐灰色土が認められる。

焼土層には鎌倉時代の瓦が多く含まれ、シルト質土層には奈良～平安時代の瓦が含まれる。また、焼土層より上から凝灰岩切石を抜き取るための掘り込みが入っている。なお、濁灰黄色砂混土層は後述する石敷きの内側下部の土に相当し、石敷き外側には灰褐色シルト質土が堆積している。濁暗黄色砂礫混シルト質土層は整地層と考えられ、同様の整地層は西・北側にも認められる。

地山は黄灰色礫混粘土・黄色粘土・橙色砂質土など、場所によって異なる。標高は南東から北西に向かって低くなり、第4発掘区南部で60.9m前後、基壇周縁付近は60.6～60.7m、第2発掘区西部で60.4m前後である。

III 検出遺構

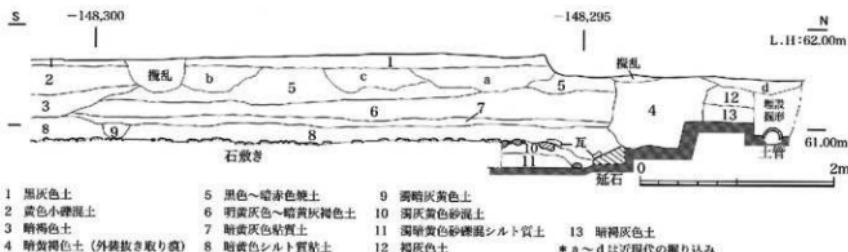
東塔跡に関連する遺構もしくはその可能性がある遺構は、東塔基壇（南・北・西階段および基壇辺）のほか、溝、土坑、石敷きがある。その他の検出遺構として、古墳時代以前の柱穴群、溝、土坑、流路、奈良～平安時代の柱列、溝、土坑、鎌倉時代以降の池状遺構、江戸時代以降の盛土などがある。

東塔に関連する遺構

東塔基壇 第1・2・3発掘区において南・西・北階段部分および基壇辺を確認した。南・北階段は延石のみ残存していたが、西階段の切石は全く残っていなかった。基壇辺も、昭和49年に確認されていた南西端の延石が残るのみで他は残っていないかった。ほとんどの外装切石は後世に抜き取られているが、延石が据えられていた部分は薄い水成堆積砂が溜まっており、比較的明瞭に据付位置が確認できた。

南階段は後世の凝灰岩抜き取りによって階段部分を構成する盛土も大きく削られていたが、一部には盛土と思われる土層が確認できる。階段部分の様相を見ると、内





第1発掘区北端部西壁土層図 (1/50)

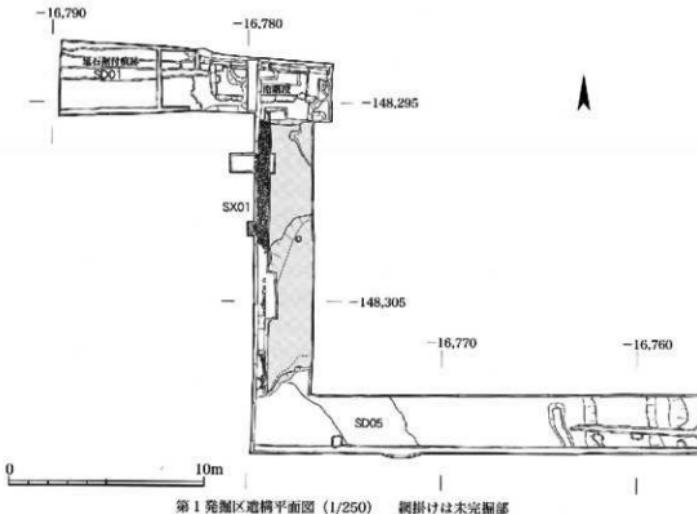
側には延行よりも高くまで地山が残っており、少なくとも厚さ0.4m以上周囲を削ることによって壇を形成していることがわかる。北・西階段でも地山が一段高く残っている。このような「削り出し」の手法は西塔基壇とは異なっている。また、西塔基壇で見られたような丁寧な版築層は確認できず、削り出した地山の上に比較的厚い盛土を重ねて階段部分は築成されている。

階段の規模は、南階段が延石の外幅で推定幅約5.4m、出か約1.6mで、西塔基壇と同規模である。西階段も痕跡から幅約5.4m、出か約1.6m。北階段の幅は不明で、出はやや長く1.67m位に推定復元される。延石の使用石材は概ね長さ100cm前後、幅約40cmの凝灰岩切石で、基本的に規格は揃えていたと見られる。ただし一部には寸法合わせのための短いものも用いられている。

階段部分以外の基壇縁辺にも階段延石から続く延石据付痕跡が確認できた。その前面に沿う幅0.5m前後、深さ0.05mのSD01は、西塔跡でも認められた延石前面の溝状の窪みであるが、やはり玉石や切石などは認められず、この窪み自体が雨落溝と確定するには至らなかつた。南階段南西角付近ではここから奈良三彩陶器片がまとまって出土した。

東塔基壇全体の規模は、南北階段先端間の距離が24.45m、南辺延石と北辺延石据付痕跡との外縁の距離が約21mである。西塔基壇に比べ南北階段先端間は0.15mほど長いが、西塔基壇自体の東西と南北の距離も0.1m程度の違いが見られることから、同じ規格の誤差範囲と考えるのが妥当と思われる。

東西両基壇の位置関係については、推定中心間でほぼ



第1発掘区造構平面図 (1/250)

135 mあり、東塔の方が中心位置で約0.5 m南に位置する。南北両階段と南西辺の延石底面および西階段の延石据付痕跡の標高はいずれもほぼ60.65 mで、西塔よ

り約1 m高い。

溝SD02・03 SD02は、西階段前を南北にはしる幅約1 m、深さ約0.2 mの溝で、北側で不明瞭と



塔跡および第1発掘区北部（南から）



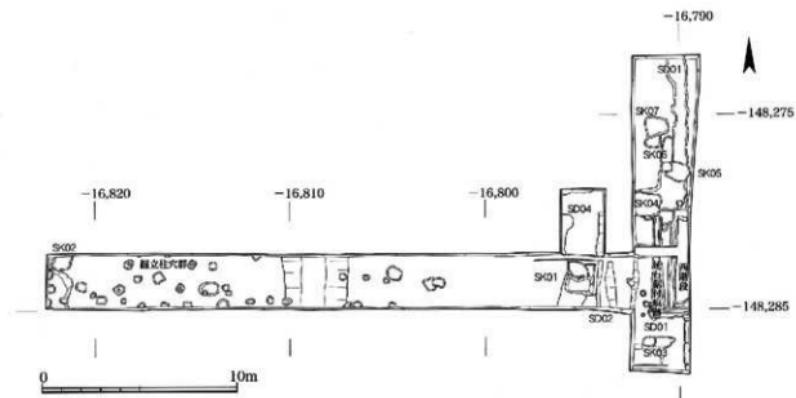
第1発掘区南階段延石（南から）



第2発掘区（西から）



第2発掘区西階段（南西から）



第2発掘区遺構平面図 (1/250)

なっている。SD 03は北階段前を東西にはしる幅約1.2m、深さ約0.35mの溝である。SD 03は壁面が段をなして立ち上がり、深さも深く、形的にはSD 02よりもしっかりとしている。この両者の溝は西塔跡で認められた基壇を廻る周溝と位置的に対応し、同様の遺構である可能性が高い。ただし、西塔に比べ幅が狭く深い。今回の調査では両者が直接繋がっているかどうかは確認していないが、両者とも埋土に砂層が認められ、同じ機能をもっていたものと考えられる。

土坑SK 01 西階段前で検出した、一辺約1.5mの平面方形、深さ約1mの断面方形掘形の土坑。柱の抜き取り穴と思われる痕跡と重なっており、柱が立てられていていた可能性が高い。抜き取り穴埋土には拳大の礫がいくつか含まれていた。SD 02よりも古いが、遺物からは奈良時代以降のものと判断される。一連の建物となるような掘形は確認できず、東塔との関連は不明であるが、位置と時期から東塔建立と何らかの関わりがある可能性

が考えられる。

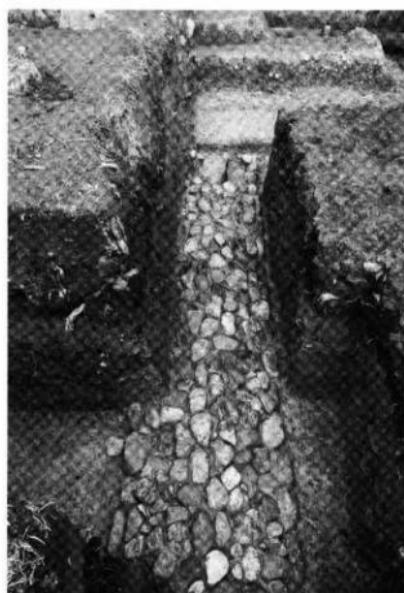
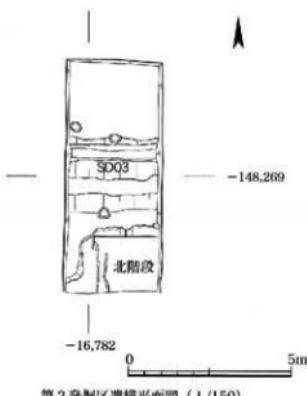
石敷きSX 01 南階段前から南に延びる参道状の石敷きである。南端は本調査区内では水田耕作によって削られ不明であり、残存部も南北は後世の掘削で大きく壊されている。幅約0.8m、残存長約14mで、横断面が蒲鉾状を呈し、中央が基底から約0.1m盛り上がる。両側に長さ20cm程度の見切り石を縦長に並べ、その内側に蒲鉾状に盛った土の表面に拳大以下の円礫・亜角礫を敷き詰めている。石はタイル張りのように表面を覆っているのみで、下方から持ち送りにはなっていない。特に敷設単位は認められず、北から3m以南は表面の石が崩れている部分が多い。

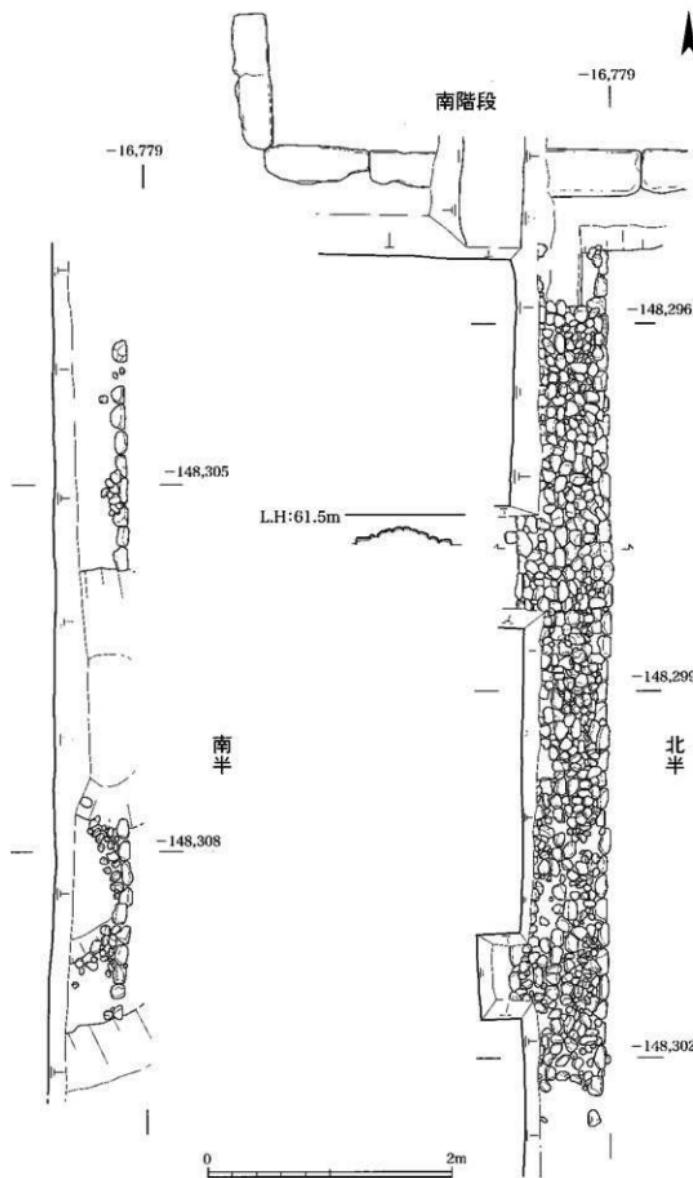
主軸が基壇の中軸線に揃うことから、塔を意識したものと判断できるが、石敷きの下層から9世紀後半と見られる土器が出土しており、創建当初に敷設されたものではないようである。またその形状から常用の参道として機能したものではない可能性が高い。

以上の他に、階段前付近に小穴がいくつか認められる。足場穴の可能性も考えられるが、確定できない。

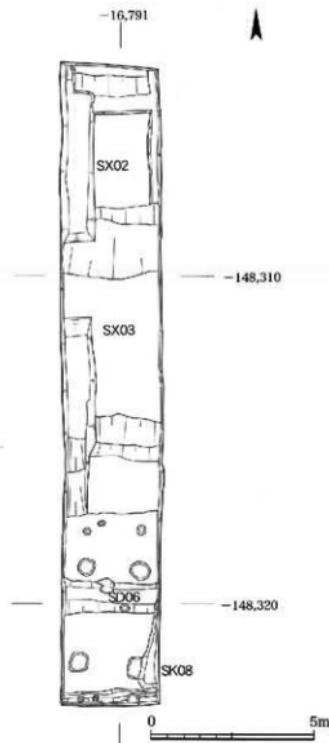
古墳時代以前の遺構

掘立柱穴群 第2発掘区西部において検出した柱穴のいくつかは、掘形および並びが方位に対して振れてい





石段 S X 01 平面・断面図 (1/40)



第4発掘区遺構平面図 (1/150)

る（北で東に約30°）ものがある。これらは古墳時代以前の建物跡と考えられるが、時期が確定できる遺物は出土していない。今回の調査区内では明確な建物を認定し得ないが、柱間寸法が一間1.4mほどの建物があったものと推定される。

溝S D 04 第2発掘区で検出した、幅1.5m前後、深さ約0.2mの南北溝で、北で東にやや振れる。発掘区北端で曲がるか、他の溝と重なっているものと考えられるが、平面検出でとどめた。SK 01より古く、埋土は暗紫灰色土で6～7世紀の土器が含まれている。

土坑SK 02～07 SK 02は第2発掘区西端で検出した、直径約1m、深さ1m以上の平面円形の土坑。6～7世紀の須恵器片が出土した。SK 03～07は第2発掘区西階段前のSD 01埋土や整地土などを全て取



第4発掘区（南から）

り除いた後、地山上面で検出した土坑であり、少なくとも基壇築成前のものと判断される。SK 07以外は掘り下げていないため詳細は不明であるが、SK 03は上面部で古墳時代のものと考えられる土器片が出土しており、SK 04は埋土の上面に階段延石の破片が残っていた。SK 07は一辺1m前後の平面方形で、深さ約0.2mの土坑。時期が決定できる遺物は無いが、基壇築成前のものである可能性が高い。これらの土坑の埋土は概ね暗紫灰色土である。

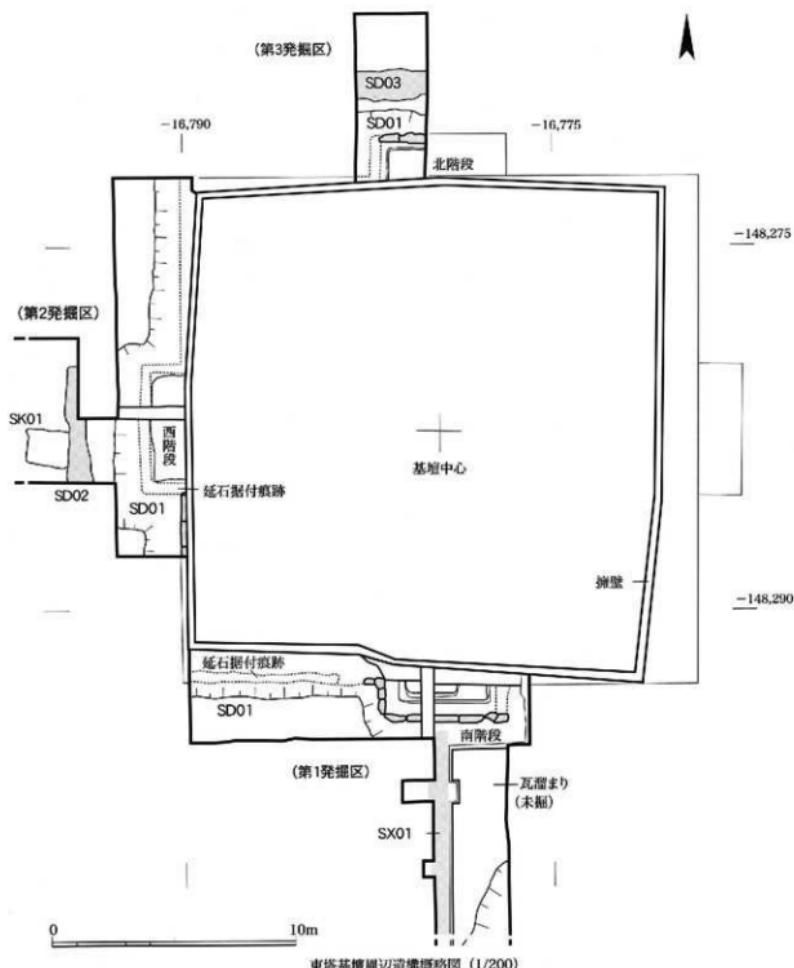
溝S D 05 第1発掘区南部で検出した、幅1.2m前後、深さ約0.4mの旧流路である。埋土は砂で下層から弥生時代前期、上層からは6世紀頃の土器が出土している。

古墳時代以前の遺構については、基本的に確認のみにとどめている。

奈良～平安時代の遺構

掘立柱列 第4発掘区南部で検出した柱穴は東西に延びる2列の柱列の一部と推測される。柱筋が揃うことから東西棟建物の一部である可能性もある。柱間一間分(1.8m)を検出したのみで詳細は不明。それぞれ外側に直径0.2m程度の小穴が伴う。

溝S D 06 第4発掘区の柱列の合間をはしる、幅約1m、深さ約0.3mの東西溝。上面には瓦片が多く散っていた。柱列との新旧関係は不明である。



土坑SK08 第4発掘区南東隅にわずかにかかる土坑である。平面形は不明であり、長さ2.5m以上、深さ0.2m以上。埋土から10世紀頃の縁軸陶器が出土した。

柱列、SD06とともにSK08に壊されていることから、これらの遺構の時期は奈良～平安時代と推定する。

鎌倉時代以降の遺構

SX02 第2発掘区で検出した池状の掘り込み。南北13m程度、東西の長さは不明であるが、東は発掘区

外10m以内で取まる。深さ約1mで、底面は南北10mほどにわたってほぼ水平で両肩のみ立ち上がる。底部から瓦質土器片が出土しており、最下層の粘土が溜まった後に流れ込んだ遺物には江戸時代と見られる陶器片が混じる。埋土の堆積からみると一時期に沼地状になっていたようで、その上に後述の盛土がなされている。用途不明であるが、塔に直接関係したものではないと考える。

SX03 南西マウンドとした高まりである。そもそ

も第4発掘区を設定した目的は、この塔跡南西に島状に残る高まりが何であるかを確認することであった。現況、東西約21m、南北約8m、北側の水田からの高さ約1.4mの長方形形状のマウンドである。断ち割って確認した結果、奈良時代の瓦片を多く含む土によって盛り上げられたもので、その直下に先述のS X 02があることがわかった。盛土内には江戸時代とみられる染付け陶器片が含まれており、近世以降に周辺を削平した土を積み上げたものと考えられる。中央部で厚さ約1.6mである。

V 出土遺物

出土遺物は整理箱で260箱あり、そのほとんどが瓦類である。整理未了のため詳細は不明であるが、軒丸瓦には6138型式E種、7251型式A種、および「大安寺」「大安寺塔」の文字瓦、軒平瓦には6664型式A種、6712型式A・B種、および「大安寺寶塔」の文字瓦が見られる。このうち文字瓦は鎌倉時代の塔修理に使用された瓦と考えられ、焼土層から多量に出土した。奈良～平安時代の瓦は延石直前部分の暗黄色シルト質粘土に覆われていたものが大半を占める。この他瓦類には鬼瓦、埠がある。

土器類は少なく、ほとんどは各層中に1～2cmの小片で混在しているものであり、土師器皿の破片が多いようである。南階段西角付近で奈良三彩陶器壺の破片がまとまって出土したほか、若干の奈良三彩陶器片が出土している。第4発掘区SK 08からは縁軸陶器小片が出土した。その他、弥生～古墳時代の土器が出土している。

V 調査所見

今回の調査で東塔基壇の規模が確認できた。寸法に若干の誤差が見られるものの、両塔基壇は同規格であったとみてよいだろう。ただし、東塔の基壇化粧の残存状態は西塔に比べてかなり悪く、復元すると基壇自体も東辺

が大きく削られていると判断され、現在の擁壁で囲まれた土壘の東辺は1.5mほど基壇内側に入り込んでいる。

基壇の構造についても西塔と同じ壇正積基壇であることは間違いないと考えられるが、階段部分では地山の削り出しによって壇が形成されていることが確認された。これは西塔基壇が階段部分を含めて基底より下から整地を行ない、その上に丁寧な版築を施しているのとは大きく異なる。地形的な要因が大きいと考えられるが、築造工程に違いが見られることは両塔の築造の背景を考えるうえで重要である。

文献史料に出てくる鎌倉期の東塔修理については今回の調査結果から事実と判断することができる。13世紀中頃の修理の際に用いられた瓦とみられる「大安寺寶塔」などの文字瓦が焼土中から多量に出土したことは、修理後、最終的に東塔が焼け崩れたことを示している。

南階段前の石敷きは、遺物の出土状況からみて、9世紀後半～10世紀後半までの間に敷設されたものと考えられる。従って、8世紀中頃とされる東塔創建時に設けられたものではなく、後世に付け加えられたものと判断される。幅が狭く、形状的にも上面が曲面をなしていて歩きににくいことから、実際の通路として機能していたとは考えにくく、装飾的もしくは一時的なものとしての可能性が高いと考えられる。そして、この時期もしくはそれ以後も含めて、南が東塔の正面として意識されていたと考えられる。

今回の調査は東塔基壇の規模および残存状況の確認を主眼としたため、その他の諸遺構に関しては全体像を確認していないものもある。また、塔周囲に推定されている回廊等の回縁施設については今回の調査でもその存在は確認し得なかった。

(松浦五輪美)



D A 第114次 出土軒瓦 (1/4)
(拓影は2個体を合成)



北階段前瓦出土状態 (北東から)

(2) 塔院地区の調査 第115次

I はじめに

調査地は、大安寺旧境内の伽藍復原によると塔院に当たり、東塔の北側や西寄りに位置する。現在は八幡神社の境内である。神社内で発掘調査を行うのは今回が初めてであり、大安寺塔院内の様相を確認することを目的に調査を行った。発掘区は東西3.5m、南北1.5mの浄化槽設置坑の掘形に合わせて設定した。

II 基本層序

上から表土（暗茶褐色土）、整地土A（黄灰色土）、標高60.7～60.8mで整地土B（黄茶灰色土以下土層図5～11）と続き、標高60.3～60.4mで礫混じりの灰茶色粘土の地山に至る。

整地土A（黄灰色土）は、神社境内の基本的な地盤造成土とみられ、厚さは0.7m程度である。キメが細かく均質で、瓦や土器の破片、わずかな須恵器の細片を含む。土器のほとんどが細片のため詳細な時期を判別できるものはない。他に平安時代以降の軒平瓦、整地土B直上から奈良時代の軒平瓦6664型式R種、鉄釘が出土した。

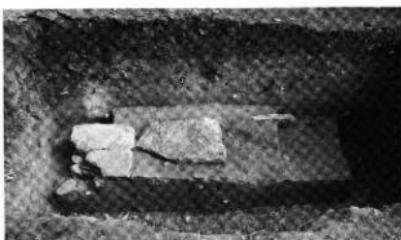
整地土B（黄茶灰色土以下）は、厚さ0.4～0.5mでやや固く締まっており、厚さ0.1～0.2m程の層状の堆積が観察できる。地山直上から11世紀中頃～後半の土器皿片、下層部から9世紀中頃～11世紀中頃の黒色土器A類腕片が出土した。他に軒丸瓦6137型式A種、軒平瓦6716型式C種、丸瓦片、平瓦片、土器片、須恵器片、円筒埴輪片、鉄釘が出土した。

III 検出遺構

整地土B上面に据えられた石列を検出した。また、表土直下から黄茶灰色土まで達する搅乱土坑2基が掘り込まれており、これらの埋土には江戸時代末期の土器や明治時代以降の磁器などの他、後述の凝灰岩製部材と同様の部材片が含まれている。

整地土B上面の石列は、破損した凝灰岩製部材の北端を描えて東西に並べたもので、東側が縦50cm×横75cm×厚さ15cm、西側が縦53cm×横55cm×厚さ15cmで、切欠きなどの加工痕跡があり、羽目石などの基壇外装石を転用したものである。これらを据えるための掘形はなく、整地の最終段階で、石の上面がほぼ水平になるように瓦片や石を敷き重ねて調整したうえで据え、上半分を露出させた状態で埋め込んでいる。この石列の両端は、前述の土坑により搅乱されているが、土坑埋土に同様の部材が含まれていたことから、他にも石が据えられている可能性がある。

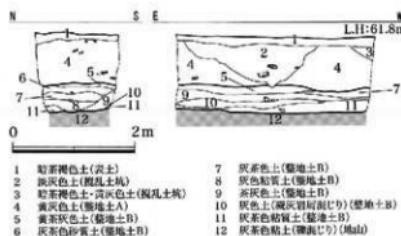
（原田香織）



発掘区全景（南から）



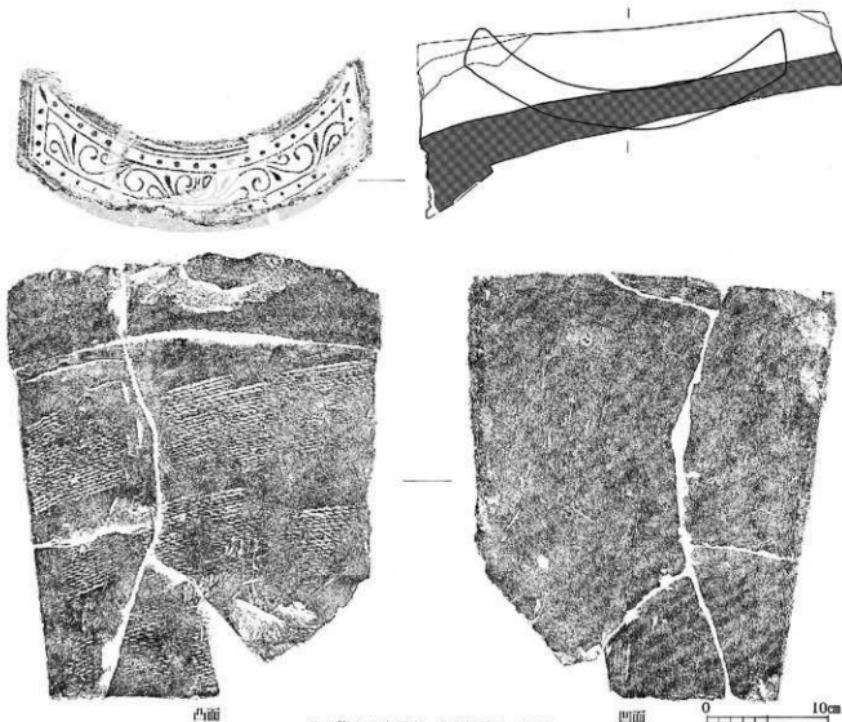
D A 第115次調査 発掘区遺構平面図 (1/80)



D A 第115次調査 発掘区東壁・南壁土層図 (1/80)

IV 出土遺物

出土した遺物のうち、軒瓦について述べる。軒瓦は6点ある。軒丸瓦の内訳は6137型式A種1点、平安時代以降のもの2点（搅乱土坑）で、軒平瓦の内訳は6664型式R種1点、6716型式C種1点、平安時代以降のもの1点である。整地土B出土の6137型式A種と6716型式C種はいわゆる大安寺式軒瓦で、組み合う小型瓦の一対である。整地土A出土の6664型式R種は大安寺創建瓦6664型式A種によく似るが、A種が上・下区分の珠紋数が21なのに対し、R種は19のため、内区唐草紋と珠紋の位置関係が異なる。段頭I Lで、顎面はヨコケズリ。平瓦部凹面は斜位の縄タキを行うが、端脚から幅9.0cmほどは横位の縄タキ。瓦当側面はタテケズ



DA第115次調査 出土瓦平瓦 (1/4)

リ。凹面は瓦当側を幅4.0cmほどヨコケズリし、後方はタテケズリするが、狹端から幅5.0cmほどは一部布目痕を残す。注目されるのは6664型式R種が、後期難波宮創建瓦である難波宮6664型式B種と同范で、造瓦技法も共通することである。6664型式R種は大和では山田道の調査で1点出土したのみで、大安寺のみならず平城京内では初めての出土例となる。いかなる背景で大安寺に搬入されたか興味深いことであるが、現段階では不明。ただし、6664型式R種が難波宮創建瓦で8世紀第2四半期の製作年代が与えられていることに対し、大安寺での出土地が、奈良時代後半以降に整備されたとみられる塔院地区から出土していることからみて、生産地から直接に搬入されたとは考えにくい。むしろ6664型式R種を含む難波宮の瓦は、長岡宮造営時に資材として運ばれていたことが判明していることから、難波宮から長岡宮を経て、長岡宮造営以後に大安寺へ搬入されたとみるのが妥当と考える。このようなことから、今回出土し

た6664型式R種は、史料からは明確ではない大安寺塔院の造営時期を考える上で、貴重な資料と位置づけることができる。

(原田憲二郎)

V 調査所見

今回の調査では奈良時代の遺構はなかったが、2時期の整地を確認した。まずは平安時代後期以降に山地直上に造成された整地土Bで、この上面には、大安寺伽藍に使用されていたと思われる基壇外装石を2次的に転用した石列があるが、整地の目的や石列の性格は明らかではない。その後造成された整地土Aは、神社境内の整備に伴う整地によるものである。八幡神社は大安寺の鎮守社として平安時代に建立されたものであるが、現在地への移建の時期は不明で、今回の調査でも明らかにすることには至らなかった。

(原田香織)

- 1) 奈良市教育委員会「七尾瓦窯跡（工房跡）」1999のCタイプの技術。
- 2) 奈文研「山田道第2・3次調査」『飛鳥・難波宮発掘調査報告2』1991
- 3) 奈良市史編纂委員会「奈良市史社編」1985 奈良市